



2009
Leaf
鹿児島県奄美パーク
事業報告書リーフ

目 次

I	鹿児島県奄美パーク概要	2
II	平成21年度の事業実績について	3
III	奄美の郷企画事業	4
1	季節感（年中行事）を取り入れたイベントの開催	4
2	奄美の郷ライブステージ	7
3	文化講演会	9
4	その他の自主事業	10
IV	田中一村記念美術館企画事業	12
1	奄美関係作家展	12
2	一村シンポジウム	14
3	第8回奄美を描く美術展	15
4	「第5回新緑～紅葉スケッチコンクール」	15
5	「第5回新緑～紅葉スケッチコンクール」及び 「第8回奄美を描く美術展」授賞式	15
6	その他企画展	20
7	その他	21
V	その他	23
VI	各種イベントポスター	25
VII	奄美パーク応援隊について	29
VIII	平成21年度美術講演	31

I 鹿児島県奄美パーク概要

1 施設の目的

鹿児島県奄美パークは、奄美の美しい自然や多様な文化・歴史をわかりやすく紹介した総合展示ホールや奄美シアター、人々の交流の場を提供するイベント広場からなる「奄美の郷」と、奄美の自然を描き集大成させた孤高の日本画家「田中一村」の作品を紹介する「田中一村記念美術館」の二つの施設を中核とする奄美群島全体の新たな観光拠点として、笠利町節田の旧奄美空港跡地に建設された。

2 設置者 鹿児島県

3 開園年月 平成13年9月30日

4 指定管理者 奄美群島広域事務組合（H18.4.1～H23.3.31）

5 園長兼館長 宮崎 緑（千葉商科大学政策情報学部教授，NHK「NC9」初の女性ニュースキャスター）

6 園地面積 約77,000㎡

7 総事業費 約78億円

8 施設の概要

(1) 奄美の郷（延べ床面積：約3,200㎡）

白い貝殻をイメージした外観。建物内の梁などは、琉球松の大断面集成材でソテツの葉をイメージした造形。

○総合展示ホール，奄美シアター（有料）

○アイランドインフォメーション，イベント広場，レストラン，売店

(2) 田中一村記念美術館（延べ床面積：約2,490㎡）

奄美の海をイメージした池に3棟の高倉が浮かぶ設計。床はイタジイを使用。

○常設展示室，特別展示室（有料）

○企画展示室，ガイドダンス室，図書資料室，喫茶，ミュージアムショップ

(3) 一村の杜（面積：7,000㎡，平成19年7月20日完成）

6つのスポットで構成されている遊歩道。田中一村の奄美での作品に描かれている草木を植栽。それぞれのスポットで作品に描かれている風景を鑑賞。

(4) その他の施設

○多目的広場（面積：約3,780㎡），野外ステージ，展望台，駐車場（約240台）

9 観覧料金 共通観覧料：一般600円（20人以上の団体は480円）

高・大学生400円（同320円）

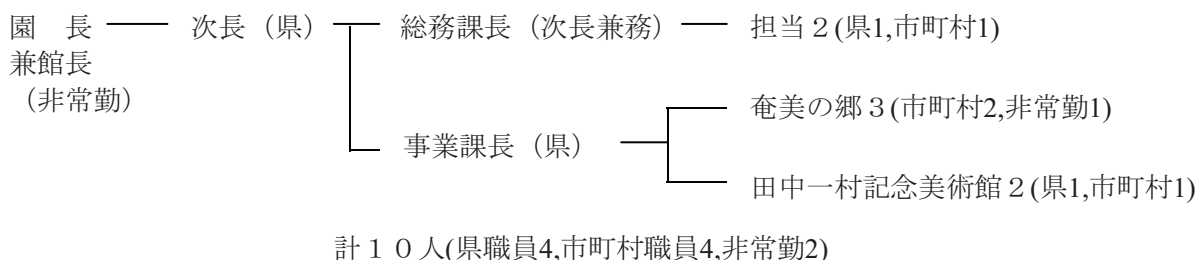
小・中学生300円（同240円）

10 休園日 毎月第1，第3水曜日(祝日の場合は翌日)(4/29～5/5，7/21～8/31，12/30～1/3は開園)

11 開園時間 9:00～18:00（7月，8月は19:00まで）

12 入園者数 平成22年3月末現在 延べ 1,434千人

13 組織図



※平成21年度末現在

Ⅱ 平成２１年度の事業実績について

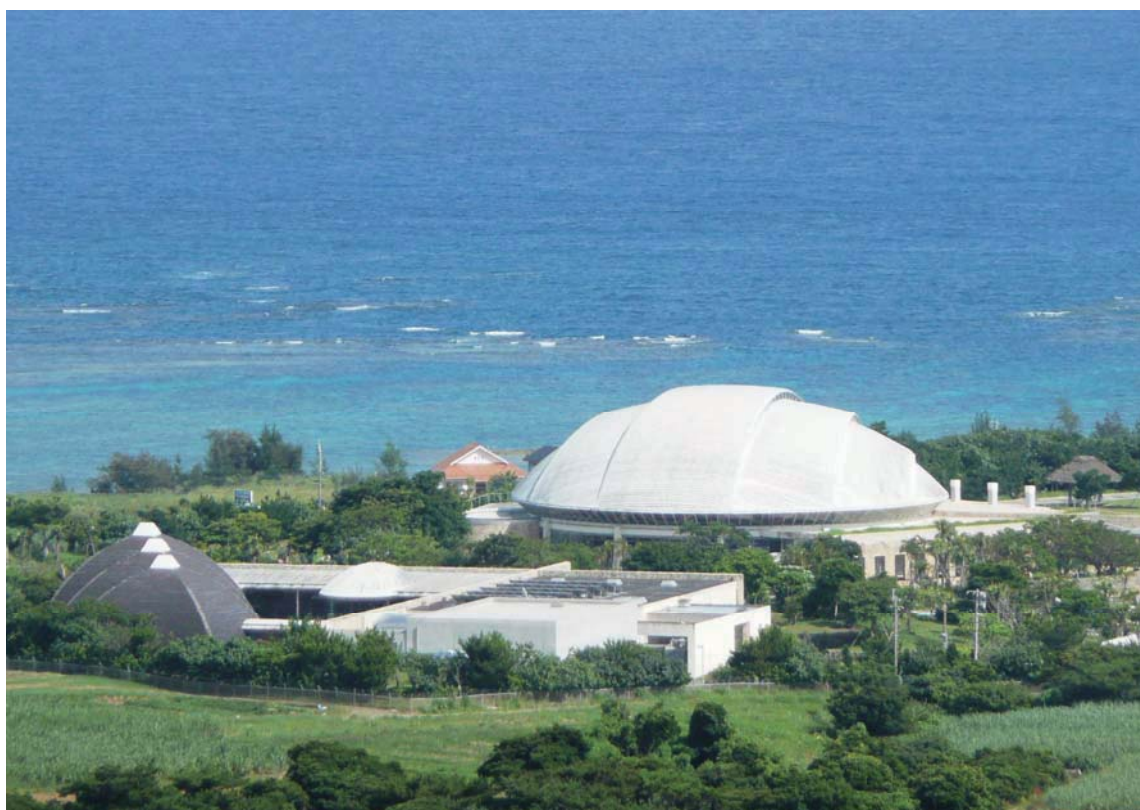
「奄美パーク」は、奄美群島の観光拠点の一つとして奄美群島に居住する方々の交流等を目的に、奄美の自然、歴史、多様な文化を紹介する「奄美の郷」と奄美の自然を描き集大成させた孤高の画家「田中一村」の作品を紹介する「田中一村記念美術館」を中核にオープンしました。平成２２年３月末現在、約１４３万人の入館者があり、来たる平成２３年９月３０日にはいよいよ開園１０周年を迎えることとなっております。

「奄美の郷」においては、主に「イベント広場」でシマ唄、伝統芸能、踊りで構成するイベントを開催し、「田中一村記念美術館」においては、「企画展示室」において奄美関係作家展、奄美を描く美術展、創作体験教室などを開催しています。特に２１年度はストリートダンスや大島紬ショー、フラメンコなど楽しい趣向も取り入れました。

また、今年の７月２２日は皆既日食ということで、コンサートやプラネタリウムなど様々なイベントを開催し、島内外から多くの観光客が訪れました。

これらの事業の実施により、奄美の多様な文化や自然等の魅力を観光客に紹介するとともに地元の方々との交流も図りました。

平成２２年度以降も、地元の皆様とともに歩いていく奄美パークを目指し、皆様からの助言や力添えをいただきながら事業を実施していきたいと考えております。



Ⅲ 奄美の郷企画事業

1 季節感（年中行事）を取り入れたイベントの開催

（1）あまみっ子フェスタ

子供たちを対象にしたイベントを開催。

日時：平成21年5月4日（月）13:30～16:00

場所：多目的広場

内容：アマンディー太鼓（奄美市立節田小学校）のオープニングで始まり、舞丸（マイマル）さんによる大道芸「見世物屋」では、会場の親子たちがその芸をおっかなビックリで見て、大いに大道芸を楽しんでいた。その後、手作りで楽しむ昔あしび（奄美手熟師会）、広場で遊ぼう（奄美市レクリエーション協会）などで親子連れが竹とんぼ作りやバルーンアート作りを体験した。最後に、あそびうたサークル「ばすてる」による、つながりあそび・うたでは会場の子供達がゲームに参加し大いに楽しんでいた。

参加者数：約660名



（2）奄美パークわらべ島唄大会

奄美の将来を担う子供（あまみっ子）たちが、シマ唄を通じて奄美固有の伝統文化への理解を深めるとともにその技法を学び、シマ唄文化を広く後世に伝える。

日時：平成21年5月5日（火）10:00～15:00

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：奄美の将来を担う子供（あまみっ子）たちが、シマ唄を通じて奄美固有の伝統文化への理解を深めるとともに技法を学び、シマ唄文化を広く後世に伝える目的で開催した。

オープニングには、審査対象外だが、1名の保育園児が華を沿えてくれた。

小学校低学年の部に11名、小学校高学年の部に14名、中学生の部に7名が参加し、それぞれ優勝を目指し、師から学んでいるシマ唄を熱唱してくれた。

表彰式では、部門ごとの優勝・準優勝・三位の受賞者に、宮崎園長から賞状と記念品が授与され、最後に審査員やゲストと一緒に記念写真を撮影した。

参加者数：約250名



(3) ネリヤカナヤフェスタ

多くの恵みをもたらしてきた奄美の海を来園者に紹介するイベントを開催。

ア オープニングイベント

日時：平成21年6月21日（日）13:30～15:30

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：勇壮で迫力のある道の島太鼓のオープニングで始まり、可愛く華やかなフラカオスタジオによる常夏の海を連想させるフラダンス、さざ波バンド（奄美市立伊津部小学校）による軽やかな踊りや力強い演奏で会場は盛り上がったほか、唄者、前山真吾さんと吉原まりかさんによるシマ唄ライブショーで来場者を楽しませた。

また、徳之島の加川徹氏の「海の風景展」や奄美の貝細工の展示、味の郷「かさり」による加工品の販売なども実施してイベントを盛り上げた。

参加者数：約450名

イ「ネリヤカナヤフェスタ」展示

日時：平成21年6月21日（日）

～平成21年7月31日（金）

場所：奄美の郷 アイランドインフォメーション

内容：「加川トオル海の風景展」は、徳之島の朝日・白い砂浜・夏の雲・海岸線・打ち寄せる波など海の様々な写真が展示され、来園者は足を止め熱心に見入っていた。

奄美海洋展示館による展示「サンゴ・鯨の骨の一部・ユリムン・貝細工（松元勝彦所蔵品）」では、来園者が興味深げにそれぞれを見学していた。

「貝殻を組み合わせて遊ぼう」は、子供達がカットされた貝殻を手にとって組み合わせて楽しんでいた。

期間中の来園者数：約23,919名

ウ「ネリヤカナヤフェスタ」親子工作教室

（ヤコウガイでアクセサリを作ろう）

日時：平成21年6月28日（日）14:00～16:00

場所：奄美の郷 レクチャールーム

講師：「島ぬむん」代表 植田康夫氏

内容：笠利町笠利「島ぬむん」代表植田康夫氏を講師に親子工作教室「ヤコウガイでアクセサリを作ろう」を開催した。参加者は親子に限らず祖父母と孫、観光客の夫婦など様々で、自分たちでヤコウガイを何種類かの紙やすりで磨いて、首飾りやストラップに加工し、自分で作った世界にたった一つだけの美しく仕上がったアクセサリを満足げに眺めていた。

参加者数：28名



(4) 「サマーコンサート」～古から今ぬ世へ～ パート8

夏休み等を利用して奄美を訪れる帰省客や観光客、そして地元の人々を対象に、奄美の文化に触れていただくため、島唄を中心とした郷土芸能で構成するイベントを開催した。

日時：平成21年8月16日（日）13:30～16:20

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：奄美大島各市町村の唄者が集い、皆既日食をテーマに島ンチュにとっての月・星・太陽をカサン唄とヒギヤ唄の島唄で唄いくらべた。奄美高校郷土芸能部「太陽の子」は「六調太鼓」を艶やかに力強く演奏し、最後は来園者とともに六調で宴のお開きとした。

参加者数：約190名



(5) フユウンメコンサート

フユウンメとは、冬の折目という意味で、作物の感謝する祭りである。又、クリスマスが近づくこの時期に地域の方々がたのしみつつ、文化にふれる機会をつくるために開催した。

日時：平成21年12月13日（日）13:30～15:30

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：奄美小学校ビューグルバンドによる軽やかなマーチング演奏でオープニングを飾り、リズムカルな笠利ジャンベクラブの演奏に続いて、紬愛好結の会による艶やかな大島紬ショーが展開された。徳田ゆかりさん、人見珠代さんのデュエットではソプラノとメゾソプラノの幅広い声量の歌声で観客を魅了した。永井姉妹は瀬戸内の島唄を楽しいトークを交えて歌い上げ、来園者は聞き入っていた。また、司会は初挑戦の大島高校放送部が様々な朗読も披露しながらイベントを進行した。

参加者数：約280名



(6) 初春唄あしび

正月休みを利用して奄美を訪れる観光客や帰省客に、郷土芸能を中心に構成したイベントで、奄美の文化を紹介するイベントを開催。

日時：平成22年1月3日（日）13:30～16:20

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：坪山豊さん企画による新春恒例の「初春唄あしび」を開催した。柳清会本流による琉球舞踊で始まりシマ唄や節田マンカイ保存会による「正月マンカイ」で新年を華やかに祝った。また、フランス出身のアメリさんと坪山さん、坪山さんのお孫さんによる共演で三線とバイオリンの初コラボなどで観客を魅了していた。

参加者数：約410名



(7) 奄美パーク 春まつり ～シマジマだより～

奄美は本土より一足先に春が訪れることから、春間近なこの時期に様々な芸能を紹介するために開催した。

日時：平成22年2月28日（日）13:30～15:45

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：大島高校放送部の司会により、朝日小学校吹奏楽部の賑やかなオープニングで始まり、舞舞オールオーラの情熱的なフラメンコの踊りに続き、山田薫さんの島口漫談で会場は和やかになった。敷根樹里さんと奥田悌造さんは二人のトークを交えながら新民謡を披露し、当原ミツヨさんは大笠利に昔から伝わってきた「フーガサン」の島唄で来場者を楽しませた。また、大島高校茶道部によるお茶会と、味の郷「かさり」による特産品バザールも実施しイベントを盛り上げた。

参加者数：約270名



(8) 奄美パーク 春まつり ～サンガツサンチ～

春まつりの第2弾として、桃の節句にちなみ女性だけの出演者によるイベントを開催した。

日時：平成22年3月7日（日）13:45～16:00

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：大島北高校の北大島太鼓部の勇壮で元気なオープニングで始まり、藤野会の華やかな日本舞踊、武島加奈ハワイアンフラスタジオの賑やかなフラダンスの踊りに続き、金久・名瀬中バスケットボール部は初の試みの球舞を披露した。次に、川口さくらさんの洗練されたバイオリン演奏。続いて、里美加・ありすさん親子の息の合った島唄。最後に、川畑さおりさんによるトークを交えながらの島唄・新民謡のあと、六調で会場全体が一体となり盛り上がった。

参加者数：約470名



2 奄美の郷ライブステージ

(1) 5月ライブステージ[「でい・まーじんま第4弾」]

鹿児島県奄美パーク奄美の郷イベント広場において、シマ唄を中心とした郷土芸能で構成するイベントを開催することにより、県内外の観光客等に奄美の文化に触れていただくとともに、地元の方々との交流を図る。

日時：平成21年5月17日（日）13:30～15:50

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：今年で4回目となる「島んちゅ会」による（でい・まーじんま）を開催した。シマ唄、踊り、三味線合奏、エレクトーン、ハーモニカとのコラボレーション、天草・六調など盛りだくさんの催し物で来場者を楽しませていた。また、サブタイトルにもなっている（でい・まーじんま）ということで会場のみなさんと出演者が一緒になって歌って、踊って楽しんでいた。

参加者数：約260名



(2) 7月ライブステージ「汝きや我きや島唄しょーろ！！」

日時：平成21年7月26日（日）13:30～15:30

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：「龍郷町島唄保存会」による（汝きや我きや島唄しょーろ！！）を開催した。シマ唄、シマ唄とジャンベ、ハンスリー、六調など盛りだくさんの催し物で来場者を楽しませていた。また、サブタイトルにもなっている（汝きや我きや島唄しょーろ！！）ということで会場のみなさんと出演者が一緒になって歌って、踊って楽しんでいた。

参加者数：約220名



(3) 9月ライブステージ「Dancer In The Park」

日時：平成21年9月27日（日）15:00～16:40

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：奄美パーク開園以来初のダンスイベントを開催。ASA大島ジュニア新体操クラブは「ずっとこれ」を可愛らしく表現し、INGは男子高校生らしく力強く、大島高校新体操部は華やかに「豊年節」を踊った。Xchildrenはマイケル・ジャクソンメドレー「ねばーらんど」をストーリー仕立てで披露した。カサリンチュはCMソングに起用されている「僕の部屋」など5曲を歌った。プロダンサーK-SUKE・PEET・SETOらは、プロの華麗なダンスを舞い来園者を釘付けにした。また、イベント初のアンコールもあり大盛会裏の内に終了した。

参加者数：約410名



(4) 10月ライブステージ

日時：平成21年10月18日（日）13:30～15:50

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：「玉城流 琉扇會 山元孝子琉舞道場」によるライブステージを開催した。琉球舞踊、シマ唄、ジャズダンス、空手の演舞など盛りだくさんの催し物で出演者も2歳から75歳までで「和洋の共演」で来場者を楽しませていた。

参加者数：約400名



(5) 11月ライブステージ「第7回 奄美島唄への誘い」

日時：平成21年11月29日（日）13:30～16:10

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：「笠龍地区民謡保存協会」によるライブステージを開催した。笠利、龍郷地区を中心に歌われる島唄、カサン唄の繊細な調べが島唄ファンを魅了し、郷土芸能の伝承活動を行っている奄美市立宇宿小学校の児童23名が「稲すり踊り2009」の躍動感あふれる踊りで来場者を楽しませていた。

参加者数：約370名



(6) 3月ライブステージ「あらしゃげていっちゃりょんかい」

日時：平成22年3月21日（日）13:30～16:00

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：「いっちゃりょん会」によるライブステージを開催した。道の島太鼓や島唄、日本舞踊、新民謡、ジャンベ、六調太鼓自慢、八月踊りなど多彩なプログラムで出演者と観客が一体となって来場者を楽しませていた。

参加者数：約450名



3 文化講演会

(1) 奄美パーク文化講演会「新春寄席」

新年に際し、普段、生の落語に触れる機会が少ない奄美の人々に、落語を楽しんでいただきつつ、奄美パークを身近に感じてもらい、新春を笑いではじめようと開催した。

日時：平成22年1月10日（日）13:30～15:30

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：前座に鹿児島県鹿屋市出身の瀧川鯉八さんが登場し、「牛ほめ」で若手らしく軽快な前座で始まった。仲入りの後には、桧山うめ吉さんが登場し三味線や歌踊りなど俗曲を披露、真打として10年の実績をもつメインの桂歌助さんはこの日2度出演し、「井戸の茶碗」「なすかぼ」を披露し、巧みな話術に、会場は笑いの渦に包まれた。

参加者数：約350名



4 その他の自主事業

(1) 第1回けんむんクイズラリー

奄美の郷及び田中一村記念美術館に展示物に関するクイズを配置し、展示物への理解や興味を促すイベントとして行った。

日時：平成21年5月3日（日）10:00～16:00

場所：奄美の郷及び田中一村記念美術館

内容：けんむんが出題するボードを奄美パーク内に12カ所置き、地図を参考にけんむんを探してクイズに答えてもらった。

ゴールデンウィークということもあり大勢の参加者で賑わった。小中学生を対象として行ったが、家族で楽しむ姿も見られた。

参加者数：約55名



(2) 第2回けんむんクイズラリー

日時：平成21年11月3日（火）10:00～16:00

場所：奄美の郷及び田中一村記念美術館

内容：奄美の妖怪けんむんが出題するクイズを館内に18カ所設置し、配付した地図をもとにまわりながら回答していくクイズラリーを行った。

文化の日の無料開放ということもあり多くの家族で賑わい、大人も楽しむ姿が見られた。

参加者数：72名



(3) クリスマスツリー点灯式

日時：平成21年12月1日（火）10:00～11:00

場所：奄美の郷 エントランス

内容：奄美パーク 奄美の郷内に設置した高さ約3メートルの巨大クリスマスツリーの点灯式を奄美パークのPRも兼ねて地元の節田保育園の園児を招待して行った。

点灯式は、園児たちが事前に作成した「サンタさんへのお願い」を書いたカードを巨大クリスマスツリーに飾ってもらい、園児たちのカウントダウンで点灯した。

点灯後、園児たちの歌、踊りやサンタさんとの交流会を行い、園児たちには、楽しんでもらった。

参加者数：約30人



(4) 第3回 奄美パークこどもクリスマス会

日時：平成21年12月20日（日）

時間：午前の部 10:00～11:30

午後の部 14:00～15:30

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：多くの子供達が奄美パークでクリスマスを楽しめるよう、昨年大好評だった「奄美パーク こどもクリスマス会」を今回、午前午後の2回に分けて開催した。

徳田ゆかりさんのミニコンサート、あそびうたサークル”ぱすてる”のかかわり遊び、ゲルドレンのダンス&パフォーマンス、銀河鉄道999～ダイヤモンドリングの彼方へ～の上映、サンタさんによるクリスマス大抽選会など、盛りだくさんのプログラムで会場は盛り上がり、親子で歓喜の声を上げ楽しんでいた。

参加者数：約3,200人



IV 田中一村記念美術館企画事業

1 奄美関係作家展

(1) 塩澤文男 絵本原画展「海神の姫 とうとうがなし」

期間：平成21年4月19日（日）

～平成21年5月17日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：東京在住の塩澤文男氏は、テレビで田中一村を知り奄美に訪れ、感じたことを絵にしてきた。作品には、奄美の植物や生き物が力強いタッチで描かれ、47点の作品が多くの観客を魅了した。

「海神の姫」では、自身の加計呂麻での海蛇との出会いをモチーフとした作品が展示された。また、7月の皆既日食をテーマとした作品「とうとうがなし」は、初めて人前に展示される作品ということもあり、訪れた人々が熱心に鑑賞していた。

期間中の入館者数：3, 164人



(2) 興克樹自然写真展「煌めきの瞬間」

期間：平成21年5月24日（日）～平成21年6月14日（日）

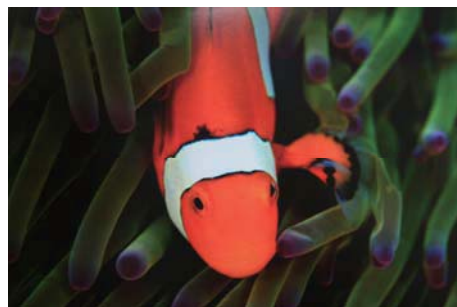
場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：田中一村記念美術館の企画展として興克樹自然写真展

「煌めきの瞬間」を開催した。リュウキュウアカショウビンやルリカケス、アカウミガメやサンゴなど、自然の宝庫・奄美ならではの環境に生息する生物を中心に、A1パネル31点の写真を展示し、また、土日の休日には展示室の壁一面をスクリーンにみため、コブシメの求愛の様子や野鳥の巣立ちの瞬間などを記録した映像を上映した。

会場に集まった観客は、今までそばにありながら感じることの無かった自然の魅力をみて、感動した様子だった。特に今回は、家族連れの観覧者が目立ち、会場も大変賑わっていた。

期間中の入館者数：1, 435人



(3) 大島紬で編んだエイ子の編衣展

期間：平成21年6月21日（日）

～平成21年7月12日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：田中一村記念美術館6月の企画展として、笠利町出身者の森エイコ氏による「大島紬で編んだエイ子の編衣展」を開催した。展示には、大島紬糸を使ったショール・ドレスを発表し、今までの大島紬糸のイメージを覆すかのような作品が並んだ。お客様には、奄美在住の年配の方々が多く見え、感動を与えた様子だった。また、7月4日（土）の森エイコ氏による講演会も多くの方が訪れ、賑わいを見せていた。

期間中の入館者数：2, 034人



(4) 皆既日食特別企画展「見て触れて感じる奄美自然博物館」

期間：平成21年7月17日（金）

～平成21年8月16日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：皆既日食特別企画展として、龍郷町環境教育推進指導員である前園泰徳さんによる「見て触れて感じる奄美自然博物館」を奄美の環境分野で活躍する奄美野鳥の会や奄美哺乳類研究会など、さまざまな団体の協力のもと開催した。

展示内容としては、奄美の天然記念物の写真や、奄美の昆虫、植物や貝などの標本、ハブなど身近な危険生物の写真、生きている小動物など多様な形態で行ったほか、展示に併せて前園氏による講演会も開催した。

奄美の方はもちろんのこと島外の方も含め多くの入場者があり、奄美の優れた自然の魅力を再認識・発見していただくと同時に、奄美の魅力を発信することができた。

期間中の入館者数：5,091人



(5) 「シュールin奄美」前村卓巨洋画展

期間：平成21年8月23日（日）～平成21年9月13日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：当美術館学芸専門員である前村卓巨氏の作品を企画展示室に展示した。赴任6年目となった奄美生活で感じた島の強い日差しと果てしなく広がる青い海、独自の感性を膨らまし描いたシュールレアリスム（超現実主義）の作品を並べた。訪れた人からは「奄美の風景の中に現実ではありえない物体が存在し、なにか訴えかけられた。物凄いエネルギーを放った作品」などの言葉があった。また、皆既日食を描いた作品などもあり、多くの方に感動を与えた。

期間中の入館者数：1,754人



(6) 平井泰輔写真展（干瀬の白波）「糸の綾 PartⅡ」

期間：平成21年9月20日（日）

～平成21年10月11日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：長時間露光の技術を使い、普段見慣れている海を平井泰輔独自の技法により表現した作品が24点並んだ。平井氏は約15年前から夜の干瀬を撮り続けてきた。その中で、月明かりの下で干瀬を長時間撮影すると、独特の表情をすることに気付く。展示された作品は、日常で見る視覚の世界とは異なり、別世界の空間を作り出していた。来場した方は、作品に顔を近づけ鑑賞するなど熱心に鑑賞されていた。

期間中の入館者数：1,749人



(7) 堀晃個展「アオイ月ガ満チルマデ、」

ア 展示

期間：平成21年12月13日（日）

～平成22年1月11日（月）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：瀬戸内町嘉徳にアトリエを持つ画家堀晃氏による個展

「アオイ月ガ満チルマデ、」を開催した。小作から200号の大作まで26点の作品は、どれも幻想的な空間を創出しており、訪れたお客様を楽しませた。また、鑑賞されるお客様の中には、絵画の上に指を走らせ、遠い昔の記憶を辿りながら思い出を語る方も見られた。今回、山口県出身の堀氏がコンセプトとしていた「よそ者からの発信」そのコンセプトのように、多くの方へ発信できたとともに、奄美で活躍する美術関係者を刺激する展覧会となった。

期間中の入館者数：2, 225人



イ ギャラリートーク

日時：平成21年12月13日（日） 11:00～

平成22年 1月 3日（日） 11:00～

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：堀晃氏による企画個展「アオイ月ガ満チルマデ、」の開催を記念し、企画展初日に堀晃氏によるギャラリートークを開催した。まず、山口県出身の堀氏から見た“よそ者から見た奄美”や奄美にアトリエを持つことになった経緯を語った。また、田中一村の生きざまや功績に触れながら芸術的文化の発展を願う持論を展開した。訪れた観客は、熱心に聞き入り、並べられた作品を前にギャラリートークを堪能した様子だった。

参加者数：61人



2 一村シンポジウム

日時：平成21年9月12日（土） 14:00～16:00

場所：田中一村記念美術館 特別展示室

内容：田中一村の「またいところ」にあたる川村不昧さんを招いた講演会を開催。千葉寺時代の一村は、川村さんの家によく出入りしており、川村不昧さんとも長い交流があった。川村さんは一村を語るとき、米邨（べいそん）と呼び、「米邨さんは、人を喜ばせるのが好きな人物であり、孤独を愛する人ではなかったと感じている」と語った。千葉寺時代の作品を前に、作品の元となった風景や人物の名前などを紹介し、一村ファンのみならず多くの方が講演を楽しんでいた。

参加者数：40人



3 第8回奄美を描く美術展

期間：平成21年11月3日(火)

～平成21年11月29日(日)

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：今年度で8回目を迎える奄美を描く美術展は、多くの企業や個人協力者から協賛金を頂き開催に至った。作品は、15都府県から146点の作品が出品された。今年度は新たに「シルバ賞」「ヤング賞」を設けたこともあってか、高校生の出品が多く見受けられた。また、美術大学生からの出品も多数あり、若い芽を育てる展覧会になった。

独立美術協会会員・多摩美術大学の名誉教授である今井信吾先生を招いた審査会では、「どれも様々な方向から“奄美”をアプローチをしており、表現に富んだ作品が多かった。審査する側を悩ませる非常に良い作品に出会った」と語った。

授賞式後の展示会場では、出品者自らが「作品の制作にあたって」等の製作過程の裏側を語って頂き、多くの見物客を呼んだ。

期間中の入館者数：2,420人



4 第5回新緑～紅葉スケッチコンクール

期間：平成21年10月25日(日)

～平成21年11月29日(日)

場所：奄美の郷 アイランドインフォメーション

内容：田中一村記念美術館企画事業として毎年開催している新緑～スケッチコンクールを今年も開催した。今年度は、2歳の子どもから一般市民まで60名が作品を出品した。素晴らしい作品群の中でも、指宿市丹波小学校1年生海江田蒼太君の作品はガジュマルを力強く大胆に描き見事に大賞を受賞した。

期間中の入館者数：2,420人



5 「第5回新緑～紅葉スケッチコンクール」及び「第8回奄美を描く美術展」授賞式

日時：平成21年11月3日(火) 13:00～14:00

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：「第5回新緑～紅葉スケッチコンクール」及び「第8回奄美を描く美術展」の当館で開催されている公募展の授賞式を11月3日文化の日に開催した。奄美市の平田市長による祝辞を頂き、宮崎館長から楯や賞状が受賞者へ授与された。「第8回奄美を描く美術展」で大賞を受賞された磯山秀夫さんは「奄美のイメージをF15のキャンバスに描くことに苦勞した。これから、奄美をゆっくり探索し、来年の作品に活かしたい」と語った。

参加者数：49人



「第8回 奄美を描く美術展」入賞作品



奄美を描く美術展大賞(西川グループ賞)

花の装い

F 1 5 油彩

磯山秀夫(茨城県)

抜群の技量を持っており、土地のモチーフを良く表現している。

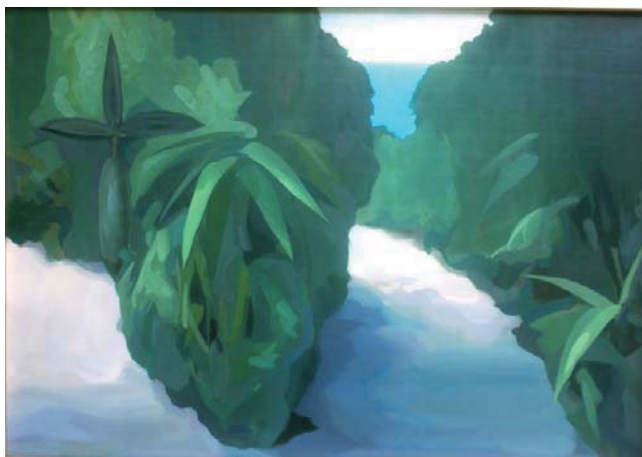
田中一村記念美術館賞
(奄美サンプラザホテル・
サンデイズイン鹿児島賞)

下り道

P 1 5 油彩

吉田浩気(東京都)

構成・表現に十分な計画性を持った作品であり、知的表現性を感じる。



アマンデー賞

加計呂麻木漏れ日

F 1 5 油彩

井上伸久(鹿児島県)

二重・三重に映り込むイメージをよくまとめた作品であり、油絵の技術にも優れた作品。



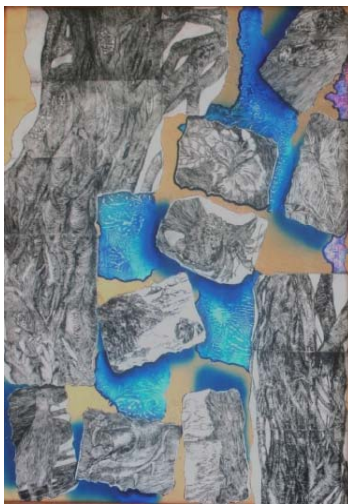
奄美空港ターミナルビル賞

アダン

65,2×53 油彩

高橋克典(石川県)

構成力・技術力が堂々として優れている。色の選び方が的確。



鹿児島県観光連盟賞

I LOVE AMAMI

・動／静

F15 アクリル版画

赤木明実（鹿児島県）

奄美のイメージを強く表現しており、
絵画表現の新しい様式を追求している。

奄美群島観光連盟賞
奄美のフルーツと海（エイ子の編衣）

12号 手編大島紬糸

森エイ子（埼玉県）

絵画とは異質の素材を使って、奄美の自然に
アプローチしており、新鮮。



佳作・奄美の海賞

アオサ（青のり）に魅せられて

65×53 水彩

山田弘美（鹿児島県）

海岸にある自然をよく捉え、訴える力がある。
自然そのものをコラージュによる表現がうまく
できた。



佳作・奄美の空賞
うもりよう（おいでね）

F15 水彩

萩原史生子（茨城県）

自然の優しさをメルヘンの世界に導いていて、非常に
優しく表現されている。



佳作・奄美の杜賞

奄美の白い花

53×53 紙アクリル

崎長史（千葉県）

全体としてゆったりとした表現であり、色彩が優しく、美しい作品。

ヤング賞（里見海運賞）
共に生きる

F15 油彩

城詩音里（鹿児島県）

風景・人物を正面から堂々ととらえ、構成力・色彩が素晴らしい。成長が楽しめる作品。



シルバー賞（里見海運賞）

花と貝

F15 水彩アクリル

川田繁吉（鹿児島県）

若々しい活力に満ちており、自分の感覚によって描かれている作品。

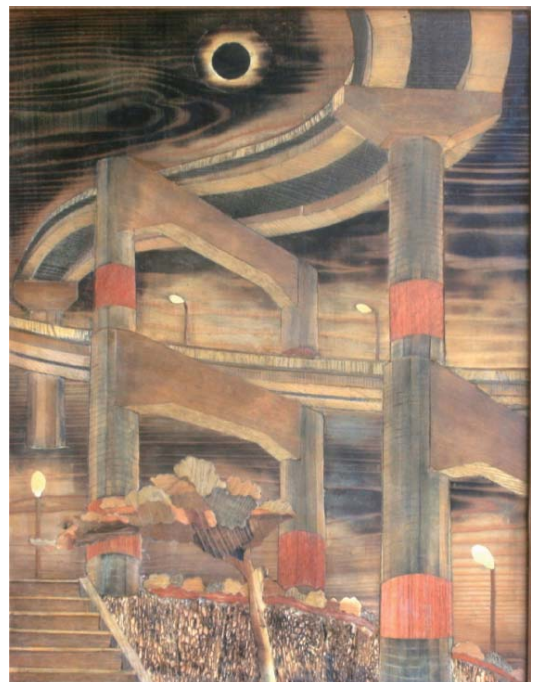


奨励賞

奄美2009

P10 木象嵌

福永勝洋（鹿児島県）





奨励賞

光芒

F 1 5 アクリル

平野良光（宮崎県）



奨励賞

金見崎(ソテツトンネル)

F 1 0 日本画

中村哲郎（鹿児島県）



奨励賞

ダチュラの香り

F 1 5 油彩

渡洋子（鹿児島県）



第5回新緑～紅葉スケッチコンクール

むるむるきよら賞

ガジュマル

海江田 蒼太（指宿市丹波小学校）

6 その他企画展

(1) 宇検村やけうちむら 暮らしの意匠展

期間：平成21年3月15日（日）

～平成21年4月5日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：短歌とふるさとの写真の融合で、忘れ去られている郷土の文化と歴史を紹介しようと、宇検村・やけうち短歌会の「くらしの意匠展」が田中一村記念美術館企画展示室で開催された。やけうち短歌会は2006年7月に結成、会員は児童生徒から一般まで60人。週に二度、作品を発表する場を設けるなど、精力的に活動している。同村の久志小、中の児童生徒13人による日常生活を通して詠んだ作品は、心和むものなど力作ぞろいだった。写真展では、宇検村の豊かな自然風景や、ノロ祭祀、豊年祭など民族文化を展示し、短歌と写真がコラボする異色の展示会が大勢の観客を魅了した。

期間中の入館者数：3,130人



(2) 「神への祈りと島のリズム」石垣昭子作品展 同時開催 ‘奄美の古芭蕉

期間：平成22年1月17日（日）

～平成22年2月7日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：奄美の染め、織りの原点である芭蕉布。その芭蕉布の再生を願う奄美芭蕉布プロジェクト実行委員会が、芭蕉布を使った織物で世界的に有名な人物 石垣昭子氏を奄美に招き作品展を開催した。さまざまな工夫をもたらした展示された作品は、どれも魅力的であり且つ繊細な技術を駆使し制作された物であり、訪れたお客様を魅了してやまなかった。また、作品に直接手を触れるなどして芭蕉の感触を楽しんでいた様子だった。初日に開催されたシンポジウムでは、石垣明子氏による西表島の芭蕉布の伝統や奄美での芭蕉布再生について講演して頂いた。

期間中の入館者数：1,608人



(3) 大高芸術祭

期間：平成22年2月21日（日）

～平成22年3月7日（日）

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：大島高等学校美術部、書道部による絵画や書道を展示した。また、県民大学で書道を学んだ市民の作品も展示。44点の作品群は、どれも個性的であり、感性豊かな作品は会場に訪れた方々を魅了した。アンケートには、地元の高校生の活躍に感動された方が多く見られた。

21日のオープニングに行われた大島高等学校吹奏楽部によるミニコンサートでは、ポピュラーな曲からスポーツ曲特集などが演奏され、会場満員のイベント広場は盛り上がりを見せた。

期間中の入館者数：1787人



7 その他

(1) 夏休み親子スケッチ大会

期間：平成21年7月26日（日）10:00～15:00

平成21年8月23日（日）10:00～15:00

場所：奄美パーク内

内容：奄美に住む小学生や中学生の親子を対象に、芸術文化振興のため、夏休み親子スケッチ大会を企画した。7月は、赤木明実先生。8月は、有川幸輝先生を講師としてお招きし、風景の描き方や色の使い方などのアドバイスを頂いた。その後、各自で奄美パーク内の風景を描き、講師による講評を受けた。参加した子どもは、自分自身の色を使いながら奄美パークを表現していた。

参加者数：40人



(2) 創作体験教室（風景画）

期間：平成21年10月11日（日）

場所：奄美パーク内

内容：県美術協会副会長の前畑省三先生を講師に、一般市民を対象に創作体験教室風景画講座を開催した。天候にも恵まれ、絶好のスケッチ日和となり、参加者はガジュマルや高倉などを思い思いの作風で仕上げた。最後のあった講評会では「色んな造形美術があり、それぞれが個性をだせている。」と語った。参加者からも、「分かりやすい指導で、ますます絵が好きになった」との声があった。

参加者数：22人



(3) 親子美術館探検

期間：平成22年1月3日（日）

場所：田中一村記念美術館

内容：ふだん見ることのできない美術館の裏側を知っていただき、地元の人により近い美術館を目指そうと、親子美術館探検を開催した。当館学芸専門員の前村卓巨が案内役として、機械室や館長室、倉庫などを見学して美術館内を回った。展示物以外で演出する施設のこだわりや設備について解説を行い、参加者からは「美術館の裏側を知ることは滅多にできないので、とても良い体験が出来た」との声を頂いた。

参加者数：14人



(4) 創作体験教室（人物画）

期間：平成22年3月13日（土）9:30～16:00

平成22年3月14日（日）9:30～16:00

場所：田中一村記念美術館 企画展示室

内容：二科会鹿児島支部長である西健吉先生を招いて、奄美での本格的な人物画講座を開催。美術愛好家や地元高校生が集まり、熱心な指導の下、腕を磨いた様子だった。終了後の講評会では、構図や背景の使い方、光の描き方などを1点ずつアドバイスがあり、受講された方々は楽しんだ様子だった。

参加者数：42人



(5) 芸術文化講演 「奄美曼荼羅～一村作品の謎解き～」

日時：平成21年11月3日（火） 14:00～15:30

場所：奄美の郷 レクチャールーム

内容：奄美を描く美術展、新緑～紅葉スケッチコンクールの授賞式があったこの日、当館学芸専門員 前村卓巨による一村の作品の解説や独自の見解を盛り込んだ講演会が奄美パーク レクチャールームにおいて開催された。若冲や翠雲などの画家と対比しながら行われた一村の紹介や、代表作でもある「クワズイモとソテツ」に隠された一村の思いを語ると、お客様からは驚きの声があがった。

参加者数：49人



(6) 美術講演 「もうひとつの生誕100年」

—東山魁夷と田中一村—

日時：平成22年2月7日（日）14:00～15:30

場所：奄美の郷 レクチャールーム

内容：長野県信濃美術館で「生誕100年東山魁夷展」を担当した伊藤氏が一村と同じ年に生まれ、東京美術学校でも同期だった魁夷の作品や生涯についてスライドを活用して具体的にわかりやすく説明した。また、田中一村と対比しながら一村研究の可能性について参加者と活発に意見交換を行った。

参加者数：26人



V その他

1 伊藤知事来園

日時：平成21年4月23日（木）16:30～17:10

場所：田中一村記念美術館

内容：県立奄美図書館開館記念式典に併せて知事が奄美パークを視察に訪れた。当美術館で預かっている、田中一村にゆかりのある宮崎鐵太郎夫妻が保管していた田中一村の作品等を見られ一村研究の貴重な資料であることをご理解いただいた。



2 皆既日食

日時：平成21年7月22日（水）

場所：奄美パーク

内容：今世紀最大の天体ショー「皆既日食」に併せて島唄を中心とした野外コンサート（夜ネヤ、島ンチュ、リスベクチュ！！）やプラネタリウム、奄美自然博物館など様々なイベントが開催され、奄美パークは多くの観光客でにぎわった。皆既日食当日に屋外イベント広場で行われた皆既日食観測会では奄美FMデイによる生中継も行われた。

参加者数：16,000名



3 県議会総務警察委員会行政視察

日時：平成21年7月28日（火）12:50～13:40

場所：奄美パーク

内容：総務警察委員会が奄美パークを視察した。当館の奥田次長が奄美パークの施設概要や入園者等の状況について説明を行った後、施設を案内した。



4 県議会文教商工観光労働委員会行政視察

日時：平成21年9月1日（火）14:00～15:10

場所：奄美パーク

内容：文教商工観光労働委員会が奄美パークを視察した。当館の奥田次長が奄美パークの施設概要や入園者等の状況について説明を行った後、施設を案内した。



5 沖縄・鹿児島連携交流事業

日時：平成21年11月21日（土）15:00～16:10

場所：奄美の郷 イベント広場

内容：島津氏の琉球侵攻から400年という大きな歴史の節目に当たる2009年に、沖縄・鹿児島県両知事による交流拡大宣言を行った。



6 小沢環境大臣来園

日時：平成22年2月21日（日）13:30～14:45

場所：奄美パーク

内容：世界自然遺産登録を視野に奄美群島の国立公園に向け、環境大臣が来島され奄美パークを視察された。また奄美パークで、記者会見も行われ多くの質問がなされた。



VI 各種イベントポスター

**GWIは
奄美パーク
であそぼう!**

5/3 ●けんむんクイズラリー 10:00～16:00
けんむんクイズラリーは、奄美パークの各所に設置されたクイズを解くことで、奄美パークの魅力を学ぶことができます。

5/4 ●あまみっ子フェスタ 13:30～
大塚宮やアマンディー本館、シマウマ館などの特別イベントを開催します。

5/5 ●第3回奄美パークわらベシマ唄大会 10:00～
この日は小中学生の観覧料が無料となります。

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

**第3回 奄美パーク
わらベシマ唄大会**

開催日時：平成21年5月5日(火)
午前10時～入場無料
開催場所：奄美パーク イベント広場

出場者募集!

- 小学生低学年の部
- 小学生高学年の部
- 中学生の部

各部門毎に「優勝」「準優勝」「三位」を決め、賞状及び記念品を贈呈します。
参加賞金員に参加賞があります!
申込は奄美パークへお問い合わせ下さい。
申込締切は4月24日(金)です。

5月5日
この日は
小・中学生の無料ゾーン
への入場が無料に
なります!

ゴールデントーク中
イベント案内
5月3日(日)
けんむんクイズラリー
10:00～16:00
参加無料

5月4日(月)
あまみっ子フェスタ
(多目的広場)
あまみっ子とご家族を対象に
した、こども向けのイベントを
開催。

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

あまみっ子フェスタ

日時：5月4日(月) 13時30分～
場所：奄美パーク多目的広場
(雨天時はイベント広場)

アマンディー本館(節田小学校)
大道芸 舞丸(尊良部(元)パフォーマー)
手作りして楽しむ音あしび(奄美手話協会)
広場で遊ぼう(奄美市レクリエーション協会)
つながりあそび・うた
(あそびうたサークル「はすてら」)

ゴールデントークイベント案内
けんむんクイズラリー
日時：5月3日(日) 10:00～16:00
場所：奄美パーク

わらベシマ唄大会
日時：5月5日(火) 10:00～
場所：奄美パーク イベント広場

舞台
演劇・人形・パペット・時流なご
うった地域の存続で、日本古来の
大塚宮を会場にアマンディーと
活動中。

大道芸(舞丸)

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

**奄美の郷ライブステージ
でい・まーじんま!!**

第4弾 島んちの会 入場無料

日時：平成21年5月17日(日)
午後1時30分～
場所：奄美パーク イベント広場

出演
島んちの会(島唄・ごんしんグループ)
島んちの太鼓(手嶌りの年寄会)
六調器リグループ(島んちの会・ん?あなんだろが!)

島唄
島山幸司
平久保
島田ハジメ
他

日唄
藤崎静子
川口真直
スレトーン
ハモニカ
小村俊彦
茂樹出陣
島唄(星少海)

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

ネリヤカナヤフェスタ
6月21日(日)～7月31日(金)

オープニングイベント
6月21日(日) 13:30～
入場無料

道の島太鼓
フラダンス
さざ波バンド
シマ唄

味の郷(ふぐり)
奄美市立中央公民館
主幹 島田ハジメ

島唄
島山幸司
平久保
島田ハジメ
他

島唄
島山幸司
平久保
島田ハジメ
他

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

**奄美の郷ライブステージ
な か ぬきやねきや
島唄しるろ!!**

龍胆町島唄保存会

日時：平成21年7月26日(日)
午後1時30分～3時30分
場所：奄美パーク イベント広場
内容：島唄・他

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

サマーコンサート 2009
～古から今へ～ 入場無料

パートB

《出演者》
笠利・龍郷・大和・宇候・瀬戸内から
各シマシマの唄者が集います!
県立奄美高等学校 郷土芸能部「太鼓の子」

日時：平成21年8月16日(日)
午後1時30分～午後3時30分
場所：奄美パーク イベント広場

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

Dancer in the Park
～NO DANCE NO LIFE～

2009.9.27 SUN 15:00～
奄美パーク イベント広場 入場無料

BE BOP CREW
PEET (from HIROSHIMA)
K-SUKE (from NAGASHIMA)
他出演者
大島高校新体操部 ASA大島ジュニア新体操クラブ
Workshop要請生 X CHILDREN etc.

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

**10月奄美の郷ライブステージ
～琉球・奄美の芸能～**

日時：平成21年10月18日(日)
午後1時30分～
場所：奄美パーク イベント広場
内容：琉球舞踊・シマ唄・ジャズダンス・空手演劇

島田 亮
熊地 俊彦

玉城流 琉球舞
山元孝子琉球舞道場

Rikka Jazz Ballet Dance スタジアム

奄美パーク 電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amanipark.com/

奄美パーク
文化の日は観覧料が**無料**になります

文化の日イベント

- 奄美を描く美術展 表彰式 13:00～
(前期～後期スケッチコンクール 表彰式も同時に行います。)
- 芸術文化講演 14:00～
「奄美美術展～村作の足跡を～」 新村卓司講演
- けんむんクイズラリー 10:00～16:00
けんむんのクイズに答えて奄美博士になろう！

多目的広場で遊ぼう！
グラウンドゴルフセット、サッカーボールなどお貸し出ししています！
バーベキュー台にもお貸しします！

奄美パーク
奄美市笠利町節田1834
TEL 0997-55-2333 FAX 0997-55-2612
http://www.amamipark.com/

奄美の郷土イラスターズ
第7回 **カサン唄 いさな**
奄美島唄への誘い

笠龍地区民謡保存協会

奄美市立宇宿小学校 稲すり踊り

日時：平成21年**11月29日(日)**
午後1時30分～
場所：奄美の郷 イベント広場

奄美パーク
電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amamipark.com/
奄美市笠利町節田1834

フュウメコンサート

日時：平成21年**12月13日(日)**
午後1時30分～午後3時20分
場所：奄美パーク イベント広場

入場無料

専会：大島高校放送部
奄美小学校ビュグルバンド
船越姉妹の会
笠利ジャズクラブ
永井姉妹
徳田ゆかり & 人見 珠代

奄美パーク
電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amamipark.com/
奄美市笠利町節田1834

奄美パーク
こどもクリスマス会

12月20日(日曜日)
時間：(午前の部)午前11:00～
(午後の部)午後2時～
入場 無料

対象：小学生及び幼児
場所：奄美パーク イベント広場

【内容】
クリスマスツリー飾り付け
サンタクロースと写真撮影
クリスマスプレゼント
クリスマスケーキ
クリスマスコンサート

奄美パーク
奄美市笠利町節田1834
TEL 0997-55-2333 FAX 0997-55-2612
http://www.amamipark.com/

初春唄あしび

【内容】
シマ唄
琉球舞踊
節田マンカイ

坪山 豊 柳清会本流
昇民謡教室
節田マンカイ保存会

日時：平成22年**1月3日(日)** 午後1時30分～
場所：奄美パークイベント広場

鹿児島県奄美パーク
URL: http://www.amamipark.com/
TEL 0997-55-2333 FAX 0997-55-2612

奄美パーク
新春寄席

日時：平成22年**1月10日(日)**
午後1時30分開演
場所：奄美パークイベント広場

入場無料

桂 歌助
松山 うめ吉

鹿児島県奄美パーク
URL: http://www.amamipark.com/
電話 0997-55-2333 FAX 0997-55-2612

奄美パーク
春まつり
～シマジマだより～

司会：大島高校放送部 お茶会：大島高校茶道部

当座ミツヨ
朝日小学校吹奏楽部
黒口漫談
山田 薫
敷根樹里

日時：平成22年**2月28日(日)**
午後1時30分～
場所：奄美パーク イベント広場

奄美パーク
電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amamipark.com/
奄美市笠利町節田1834

奄美パーク
春まつり
～サンガツサンチ～

川口さくら
川畑さおり
里あず・美加
武島加奈
ハワイアンフラススタジオ
北大島太鼓部
金久・名瀬中バスケットボール部
鹿野会

日時：平成22年**3月7日(日)**
午後1時30分～
場所：奄美パーク イベント広場

奄美パーク
電話 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
http://www.amamipark.com/
奄美市笠利町節田1834

奄美の郷土イラスターズ
あうしゃげてい
いっちゃりょんかい

日時：平成22年**3月21日(日) 13:30～**
場所：奄美の郷 イベント広場(屋内)
内容：太鼓・島唄・日本舞踊・六調太鼓自慢
新成道・ジャンベ・八月踊り
出演：いっちゃりょん会(笠利町)
：森田島唄教室(天城町)
森田美咲

いっちゃりょん会

奄美パーク
TEL 0997-55-2333
FAX 0997-55-2612
奄美市笠利町1834

Ⅶ 奄美パーク応援隊について

(1) 結成目的

鹿児島県奄美パークの業務を支援することにより、魅力ある奄美パーク実現の一助とし、ひいては奄美群島の観光の発展に役立てる。

(2) 隊員数

41名（平成22年3月31日現在）

(3) 年間活動回数

135回（延）（平成22年3月31日現在）

(4) 活動内容

奄美パーク応援隊は、奄美パーク内でのガイドを目的として平成15年に発足した。毎年20名前後の隊員でガイド活動を中心に活動が続けてきたが、平成18年4月からの更新の際に隊員が激減した。体調不良や家庭の事情などが理由に挙げられるが、ガイドをすることに抵抗を感じている声があったことから、平成18年度からは完全に分化し、展示案内ガイドは希望する隊員だけが携わることとし、研修を受けることを義務づけている。

また、活動回数は「年2回以上」としており、隊員には登録証を発行し、ガイド活動時には着用することを義務づけている。なお、登録証は奄美パークのフリーパスになっており、応援隊の活動時以外にもそれを見せることで奄美パークの有料ゾーンに入ることができる。

さらに、以前から田中一村記念美術館の企画展示のサポートをしたいという希望があったことから、平成18年度から一村サポーターを新設した。

なお、隊員は重複して分科会に参加することができ、それぞれ得意な分野で活動している。

また、応援隊の活動予定や連絡事項、あるいは活動状況報告のために、毎月「応援隊通信」を発行している。

(5) 分科会

分科会	活動内容	人数
展示案内ガイド	奄美の歴史や文化、自然、島の暮らし、観光ポイントなどの紹介。 また、田中一村記念美術館における鑑賞のポイントを案内します。	15名
手熟ガイド	機織り、三味線、太鼓、ナンコ、ソテツ編み等、島に伝わる遊びやモノ作りを通して島の紹介をします。	6名
園芸サポーター	奄美パーク園地内の植物の管理をします。	14名
一村サポーター	田中一村記念美術館の企画展示のサポートをします。	20名

(6) 活動内容・実績

ア 展示案内ガイド

毎月、隊員に来園状況予定表（団体の予約状況）を送付し、来園が可能な日にガイドを行ってもらう。また、予定以外の団体からガイドの要望があった際には、その都度連絡をしてガイドをお願いしている。



イ 手熟ガイド

各隊員がそれぞれ来園できる日に来て、実演してもらっている。

現在、三味線など島唄関係の手熟ガイドが多数。あしびの庭の民家にて行うしもうたの演奏は来園者に変好評を頂いている。



ウ 園芸サポーター

主に奄美パーク園地の植栽を中心に活動している。月に1回～2回の作業日を設けて、園内の整備をしている。2階の花壇には毎年、隊員のご厚意により提供していただいた、植物を植栽し四季折々の植物が楽しめるようになってきた。レストランからの眺めに花を添え概ね好評である。



エ 一村サポーター

一村館の企画展示作業のサポートを行う。変更や次回の日程については「応援隊通信」によりお知らせしている。

オ その他の活動

・ 応援隊しもうた倶楽部

平成18年10月から「しもうた倶楽部」を立ち上げ活動を始めた。月に2回三味線の練習を行っている。分科会に限らず応援隊員なら誰でも参加可能でしもうたを楽しく学び、イベント広場での発表や新たな手熟ガイドの育成を目的としている。



・ 勉強会

①『展示案内ガイドデモ』

展示案内ガイドは研修を受けることを義務づけているが、実際にやり慣れていない隊員のために毎月1回、デモを行っており、案内に慣れている隊員や奄美パーク職員と一緒に随行案内をする。

②『展示入替鑑賞会』

田中一村記念美術館の展示入替に合わせて、田中一村記念美術館の学芸専門員による展示作品のポイントや背景などを聞く。



Ⅷ 平成21年度美術講演

平成22年2月7日(日)

奄美パーク 奄美の郷 レクチャールーム

伊藤 羊子

前村・・・それでは時間が参りましたので、始めさせていただきますと思います。今日の進行を努めます田中一村記念美術館学芸専門員の前村と言います。よろしくお願いします。挨拶のまえにちょっと学芸員としてちょっとだけ話させていただきたいと思います。今日は僕は本当にこの日を待ちわびてと言うか、満を持してきたんです。実は紬のネクタイに金ハブのベルトをしまして、勝負をかけてきました。実は田中一村さんに関しては、これまで小説家だったり、それから、俳優、榎木孝明さんとかですね。それから雑誌の編集者であったりとか、いろんな方々が話をしてくださったんです。ところが、専門家がなかなか手を出してくれなかったということで、僕は今年で六年目になりましたけども、栃木県立美術館の学芸員の山本さんとか、鹿児島市立美術館の学芸員の山西さん、それから千葉市美術館の学芸員の松尾さん、そして石川県立美術館の末吉さん、そして千葉市美術館の館長の小林さん、これらの方に一村さんについて専門家の目で見てどうかという事で、お話しいただいてきました。僕も残り少ないと思うのですが、最後の仕上げが今日だったんです。実は今日来て下さっている伊藤さんはですね、あの東山魁夷大先生の美術館で、生誕百年のプロジェクトを成し遂げた方なのです。ですから一村さんがずーっと目標にしていた、或いはライバルにしていたあの東山魁夷美術館の関係の方にこの一村のところで話しをしてもらうというこれまで百年、生誕百年だったんですけども、これからもっといろんな話しが広がるんじゃないかなあと思って、今日は本当に嬉しい日です。もうここまでこんな所まで来ていただいて、雪の中から出てきたそうなのですけども、暖かい所と言いたいのですけども、今日は寒いのですがよろしくお願いします。今日は本当に足元の悪い中、これだけの方に集っていただいてありがとうございます。是非今日は田中一村にとっては一つの歴史的な一頁だと思いますので、どうか話をじっくり聞いていただきたいと思います。では当館の次長であります奥田の方からご挨拶申し上げます。

奥田次長・・・こんにちは。ご紹介いただきました奥田でございます。本当に足元の悪い中、足をお運びいただきまして、ありがとうございます。今日はですね、今、当館の前村からもちょうとご紹介がありましたけれども、まず東山魁夷の研究では、第一人者の一人ではあるうかと思われ、伊藤羊子先生をお迎えしてこのような講演会をできますことを私ども本当にこう美術館あげて応援をして、やっと来ていただいたという事でございます。私もですね、このような事が決ってからちょっとにわか勉強をさせていただきましたけど、一村と東山魁夷の同じような所という共通点が三つあるなと思ひまして、まず一つは、生れた年が同じである。7月の8日と同じ年の明治41年7月22日、我が一村さんは7月の22日、昨年皆既日食があった日がちょうど生れた日の101年という事になっております。それから東京美術学校に丁度入ったのも一緒であろうと、しばらく13年間位は丁度千葉県で一緒にすんでいる訳ですね。市川市と一村さんが居た千葉寺、千葉市と市川市というこういう同じ県内に住んでおったという三つの点位が一緒かなと思ひておりまして、後ですね。昭和33年にこっちに来ました。50歳の時に一村は奄美に来たわけですが、その年からぐっとう二人の生活が物凄く違ってくると、その50歳の1958年に一村さんこちらの方にみえましたが、その年に東山魁夷さんは日展の評議委員になると、そこからもう美術の方の王道を

まさに歩いていって、57歳には日本芸術委員会、それから61歳の昭和44年には、文化勲章、それから66歳の昭和49年ですね。日展の理事長、このように美術界での王道を歩いておられるわけで御座います。それから昭和30、22年ですね。39歳の時に「残照」というあの絵を描かれまして、政府の買い上げをしていただく。このように一村は極貧の生活をしておりましたが、かたや全く違う生活しておる。私ども東山魁夷の今日先生がお話される人となりをおもって、お伺い出来ればなと私どもも思っている所でございます。

今日お見えになっています伊藤先生のちょっとご紹介をさせていただきます。皆様方のお手元の方にチラシをお配りしてございますが、平成6年の1994年、長野県の文化振興事業団の学芸員としてスタートされまして、2003年平成15年に長野県信濃美術館の学芸員、ここに先生あのお併設されているわけですね。

東山魁夷の美術館が併設されているという事でございます。それから2006年平成18年に同じく、その信濃美術館学芸チームリーダーになられております。

それから昨年、長野県県民文化会館の主任格という事で現在長野県内の千曲市と上田市の文化財保護審議会員をされておられるという事でございます。一昨年私共も、田中一村の生誕百年という事で、こちらの方でフランスの方々を呼んで生誕記念をさせていただいたところでございますがやはり、一昨年は伊藤先生のところも東山魁夷の生誕百年という事でされておるようでございます。今日は一つ期待を込めて先生から凄いい話を聞きたいと思っております。先生どうぞよろしくお話をいたします。

伊藤・・今、過分なご紹介をいただきました長野県民文化会館の伊藤と申します。昨年まで約5年間、東山魁夷館の担当をさせていただきました。東山魁夷記念館は、今年で開館20周年を迎えます。本来ならば20周年に向けて、大きな展覧会をすべきところなのですが、ご紹介にございましたように、先駆けて、一昨年、大規模な生誕百年展を開催させていただきました。これは東京の竹橋にございます東京国立近代美術館さんと、それと私共長野県信濃美術館が東山先生の最大のコレクションを持っているという事で、共同開催させていただきました展覧会です。ここからは、先生のことを敬愛と親しみをこめて「東山さん」と呼ばさせていただきます。この百年展は、東京国立近代美術館の大きな協力のもとに、おそらく今後50年くらいは、絶対これだけの作品は集められないというレベルの展覧会でした。今日は、その時に担当者としてまとめた内容を報告させていただきたいと思っております。と申しますのは、東山魁夷館は、東山さんからご家蔵の作品、資料をほとんど寄贈してもらって、オープンしておりますので、この際、折角だから、館蔵の豊富な資料を図書とかデッサンとかも、総動員して、これまで語られることのなかった「東山芸術のひみつ」を搜索するというか、謎解きを試みようと思いたったものです。私自身は、この大規模な展覧会を含め、幸運な担当者生活をさせていただきましたので、今日はそんな体験も交えながら東山さんをご紹介したいと思っております。

さて、東山さんは、一村さんと比べると、人生の成功者というか、まさに画壇の中核をずっと、順風満帆にですね、幸せに生きてこられた、まさに地位も名誉も手にし、一流の方々と交流して、悔いはなし、というふうに見えるんですけども、今日ご紹介したいのは、東山さんはひょっとしたら一村さん以上に孤独な道をずっと歩いてたんじゃないかなというふうには私は思っていて、そんな事をご紹介できればなと考えております。どうぞ気楽に聞いていただければと思います。それではスライドを使いながら始めたいと思っております。

東山さんの略歴などはレジメにございますので、またお手元の資料でお帰りになって見ていただければと思います。東山さんの生涯というのは、先ほど次長様のご紹介にありました

ように、一村さんより2週間前、7月の8日に生まれ、明治41年ですね。そして平成11年に、90歳で亡くなられています。横浜に生まれ、本名は新吉さんと言います。3歳のときに神戸に移り住んで、一村さんと同じ時、東京美術学校日本画科に入ります。そしてさまざまな苦勞をした末、戦後39歳、40になる直前にやっと世の中に認められて、《残照》という作品で日展の特選になって、画壇というものの中央に入っていきます。以後の50年間は、日本画家として有名になって、国内外を問わずさまざまな地域を旅をして、作品を遺していきました。今見ていただいたようにですね、横浜生まれ神戸育ちの方の美術館が、なんで信州にあるのかという事なのですが、これが今日のひとつのテーマでもあります。東山魁夷館というのは、平成2年、1990年に当時約500点、現在950点になっておりますが、ご本人からの寄贈を受けて開館をしております。信州を代表する信仰の中心に、善光寺というのがあるのですが、その隣りに位置する県立美術館に付属して併設をされています。年に6回テーマを変えて展示替えをしまして、「風景は心の鏡である」という東山芸術を多角的に紹介しています。

さて、突然ですが、ここでちょっとクイズをさせていただきたいと思います。これは長野が所蔵します《緑響く》という作品なのですが、この作品が非常に生誕百年展でも人気でして、人気ランキングでは、《道》をおさえて堂々の第一位に輝きました。この作品は東山さんが62歳の時に唐招提寺のですね、襖絵を描いてほしいと言われて、長い間悩んだ末にやる事に決めまして、その仕事にかかる前の最後の個展の作品をどういう風にしようかなと思っている時に、スーッと頭の中に音楽が聞こえてきて、幻想の森の中を向って右から左にですね、白い馬が走っていく、それが絵になったという作品です。ここから非常に人気の高い連作「白い馬の見える風景」というのが始まるのですが、その源になった曲というのを具体的に述べていらっしゃいます。その曲をいまから当てていただきたいと思います。三曲候補を流しますので、この曲じゃないかしらという所でお手を挙げていただければと思います。本日はあいにく豪華商品は用意してないのですが、是非、ちょっとこれがそれに相応しいんじゃないかというのを考えてみてください。お手元のセルフガイド、こどもセルフガイドと書いてありますが、大人の方にも十分耐えうるものと自信を持っているガイドです。これは生誕百年展の時にですね、東京国立近代美術館さん、日経さんの協力のもとに長野でそれまで展開していた東山さんの早分かりガイドを取り入れて作ったもので、皆さんにご紹介しているんですが、ここに《緑響く》載っておりますので、それを見ながら三曲流しますがどれかお答えいただきたいと思います。それでは一曲目から流してみます。・・・・・・・・

これが一曲目の候補です。では二曲目をまいます。・・・・・・・・

これが二曲目の候補です。最後は三番目をまいます。・・・・・・・・

ありがとうございました。では皆さんが忘れないうちに、お一人につき、いずれかに一度手を上げてください。サビのメロディの短い長いがあるので、長さは関係ございません。では一番目の曲、これが《緑響く》の元の曲ではないかと思われた方ちょっと手を上げてください。

それではわざわざ東京からお越しだという方に伺ってみましょう。

どうしてそう思われましたか？

男性・・これは最初の印象です。流れを感じました。

伊藤・・ありがとうございます。外に今お手を挙げた方で女性の方がいらっしゃいました。今、挙げていただきました？

女性・・二曲目と三曲目は違う色のイメージを感じましたので。

伊藤・・それでは消去法で。

女性・・一曲目の時、アッこれだなとは思いました。

伊藤・・ありがとうございます。では、次に二曲目がそうじゃないかなとおっしゃる方いらっしゃいますでしょうか？いかがでしょうか。どうして？

男性・・静かに走っているような感じの曲かなあと。

伊藤・・ほかの二曲よりふさわしい感じがある？

男性・・そう感じました。

伊藤・・ありがとうございます。続いて、三曲目じゃないかという方。さっと手があがりました。じゃあこちらから。どうして三曲目だと？

男性・・三曲ともよく聞き、好きな曲ですけれども、最後のアダージョの方がやっぱりイメージとしては、絵のイメージとしては相応しい感じがしました。

伊藤・・ありがとうございます。ではもう一方、いかがですか。どうして三曲目を？

女性・・水面が静かな気配がしたんですけど、わからないんですけど。

伊藤・・ありがとうございました。皆さん本当にご協力ありがとうございました。この三曲は、私たちが、考えに考えて選んだものです。正解は二番目の寂しい感じの曲です。モーツアルトのピアノ協奏曲、ケッヘル488番の第二楽章でして、とても静かな、寂しい感じがする曲、これが東山さんのイメージした曲です。ちなみに一番目はですね。ノルウェーの作曲家、エドヴァルド・グリーグによる組曲「ペール・ギュント」の「朝」という曲です。そして三番目は、バッハの「G線上のアリア」です。これは、テレビCMでもおなじみになったシャープのアクオスというテレビのコマーシャルで、《緑響く》のBGMに流れていた曲です。丁度、生誕百年展をやっている時に、二ヶ月間、吉永小百合さんとこの《緑響く》が共演して、全国版のテレビCMに流れていたのですが、その時にCM制作者が最もふさわしい曲という事で選んだ曲です。これは、本当の原曲が、あまり知られていないマイナーな曲であったので、広く皆さんに共感をもってもらいやすい曲に変更したんだろうと思われる。しかし、この三曲は、いずれも《緑響く》がもつ、夏の朝の静かなイメージに合っていると思います。東山さんはですね、元々はベートーベンみたいな天才というような作家が好きだったと、ところが年を重ねていろいろ、人生を経験していくうちに、モーツアルトの曲のように、誰にも親しみやすく、解りやすいように思うのだけど実は、人の心を高いところにまで持っていつてくれるようなそういう芸術が素晴らしいんじゃないかと思うようになって共感を覚えた、モーツアルトを好きになったというふうにおっしゃっています。まさに東山さんの作品のその方向性みたいなものを表している言葉だなあというふうに私は思っているのです。そういう芸術表現、まさにそうした心が、この《緑響く》だと思います。これが今、《緑響く》が、最も愛される理由かなあというふうにも思っております。取材地も、長野県内の奥蓼科にある小さな池です。

さて、東山さんの人生に戻らせていただきます。写真などで振り返りたいと思いますが、これは五歳、真ん中が東山さんです。お父さんと左側が兄の国三さんです。東山さんは三人兄弟の次男としてお生まれになりました。まず、お父さんのお父さん、お爺様は、東山さんと同じ新吉さんという方ですけども、その方は瀬戸内の島から出まして、東京で榎本武陽について海運業で成功して、財をなした。ですからお父様の浩介さんは非常にお坊ちゃまで、全くお金に不自由の無い、十代で吉原通いをするような、そういう本当に奔放な生活を送られていたようで、実際、東山さんのお母様と結婚される前にも幾度か結婚歴があったようで

す。ただ非常に子煩悩で、とても子どもたちを可愛がってくれたと東山さんは語っています。一方ですね、この写真は向って一番左側が東山さんです。九歳の時の新吉君という事で、一番右端がお母様のクニさん。そして膝の上にいるのが八歳年下の弟の泰介さんです。ちなみに真ん中にいるのが、お手伝いさんですね。昔はやっぱ真ん中は魂を抜かれるとかですね、お写真の真ん中ってというのは、あまり良いものではないとされて、その中で一番こう身分の低い人が、わざと立ったりされたそうですが、お母様というのはお父様と正に対照的な、静かで几帳面な方で、愛知の豊橋の出身の方だということです。夜中に芸者さんをあげて帰ってきたり、酔っ払って暴れるようなお父様にもグッと耐える、明治の賢婦といえますか、心の強い几帳面なお母様、まさにこの几帳面さというのが、お母様と東山さんに共通する性質と思いますが、そういうお母様でいらした。

私は、東山さんは、お父様から受け継いだ性格というものを殆ど表に出していない、あえて自分の中で押し殺して生き行いたのではないかと思います。よく北方と南方ということ、北と南ということ、東山さんはおっしゃっているんですが、南という感覚は、東山さんにとって感覚的で開放的、情熱的で本能的、甘美なというのが、彼のイメージする南というイメージです。東山さんが、こうしたものをあえて拒否して、北へ北へ、北へ行くんだとしたのは、北を母的なものとして、常に自らを律していたからではないかと思うのです。普通、男女や、父母的な要素は逆なんですけどね。東山さんの場合、彼の中には南には父親的性格というのがあって、それと接することを恐れていたと思えるほど、お父様に似ている部分を全く見せない人生を送られていきます。

これはですね、中学の時15歳の時の《自画像》です。独学で油絵の道具だけを買ってもらって、全く描き方はわからない。絵を描く方々に言わせると全く技法はなっていないのですけど、鏡か写真を見ながら描いた自画像です。現存する唯一の油彩画、自画像で、長野県に寄贈頂いているものです。この「中」っていうのですが兵庫の今という県立兵庫高等学校の校章でして、ここの同窓会では美術学校の卒業制作など最初期の大作をご所蔵で、百年展にもご出品いただいたのですが、そのお願いの際にも、《自画像》は、兵庫高校にとってとても大切な物だ、どうして所蔵が信州なんやといわれたくらいです。この10代の頃ですね、そういうお父様ですので、ある日、突然あなた達の兄弟よという、お子さんが現れたり、それから東山さんが夜中にお手洗いに起きたら、蚊帳の奥でお母さんと知らない女の人が向かい合って水杯をあげている。あれ何だって思ったら実はそれは、お父様のお相手だった方だったりとか、そういういろんなことが、その非常に多感な時期に、精神的に繊細な東山さんには、ひどく堪えたらしくて、中学をしばらく休学したというのです。それで精神的な安定の為にという事で、お手伝いさんの実家の瀬戸内の島に暫く移り住み、静養して絵を描いたりしていたそうです。絵を描くという事は、その頃の東山さんにとっては、

「癒し」だったというか、自分でお話しになっているのですけど、例えば須磨の方ですね、池の沼地みたいな所に、木が水に映っている。池に映っているような絵を描いて、それを《静か》という題名の作品にして、校内展に出したとか、そういう事が非常に強く印象に残っていたようです。この頃までの夏の朝の思い出というのを、自らの原風景として幾度も記していますが、お母様が、三人兄弟の中でも病弱だった東山さんを夏休みになると朝早く起こして、六甲の山の方へですね、神戸の町からずっと歩いて行って、高い所のより清んだ空気を吸わせて元気にならせようというので、東山さんだけを連れて、毎朝上がってくれたと、その時に見たその清々しい神戸の町並みを見下ろした思い出っていうのも、母の慈愛とともに原風景としてよく語ってらっしゃいます。この時代、立身出世をして、お母様に楽を

させてあげたいというのが東山さんのとても強い思いでらっしゃったようです。

この写真は、帽子の字が「美」、美しいという字に変わりがして、美術学校へ入学してからのお写真です。お父様はとても利発なこの新吉少年がそんな絵の道にいくというのを大反対して、絶対ダメという態度であったそうです。しかし、そこは学校の先生と一緒に頑張って応援してくれて、お父様を説得して下さったところ、お父様は知人から、油絵画家は食べていけないらしいが、日本画家だったら食べていけるらしいという話を得て、日本画の専攻だったら受けてもいいぞというお許しが突然出たそうです。もうとにかく画家になれる、美術学校へ行けるならという事で、それから日本画の画材を買い揃え、勉強したものの、東京美術学校には、まったく駄目もとで試験に臨まれたといひます。そうしたところが丁度この年の入試、日本画科というのは結城素明先生が外国から戻ってきて、教授に就任されていて、今、日本画が描けなくてもいい、日本画科といえどもデッサンのしっかりした人を取ろうという事で、それで普通だったら入れないところを—まあそうだというふうにご本人は言ってますけども—受かってしまった。一発合格をされます。それで、一村と同時に晴れて東京美術学校への入学を果たしました。

一村さんが三ヶ月で学校を去られた後、直後になるんですが、東山さんは、一年生の夏に初めてそのキャンプ旅行、当時は天幕旅行と言ったらしいんですが、友達4人で信州木曾の御岳山に登る為に8日間の旅をしました。その時の全容がわかる手紙が、この画像の、東山さんがご両親宛てた手紙なんですけど、どうしてこんな物が出てきたかという、お母様が、息子から貰った手紙を全部番号を記して、採っていらしたお蔭といひます。後のドイツ留学の時も、そのお蔭で後年、記録がまとめられて書籍として出版できました。几帳面な母子のお蔭で、この学生旅行もその全容がわかりました。この旅行で、横浜生まれ、神戸育ちの都会っ子が、初めて雄大な山国、自然というものに直面しました。なかでも、途中、木曾の麻生という場所、平成の大合併の結果、今は残念ながら岐阜県になっちゃいましたけれども、その旧長野県の山口村麻生地区で大雨にあって、一軒のお宅、この写真のお宅に泊めてもらいます。ここの入り口の所は当時と同じだそうです。80数年前、今から四代前の奥様が迎えてくれたんですが、玄関に入ってすぐに今は健康器具とかストーブが置いてあるのですが、そこに囲炉裏が切っておりまして、そこに一晩泊めてもらったそうです。60過ぎのお母様と息子さんが一緒に住んでいるこのお宅に泊めてもらって、一夜を過ごした。その夜、この辺はなにも見るものが無いからと、すぐ傍の水力発電変電所にできたばかりの公園があるから見に行きましょうと初老の家主に誘われて、行ったそうです。この写真は80年後ですから木が鬱蒼としてますけど、当時は全然まだ若木が植えられたばかりの公園で、東山さんはそこから月を眺めたことを非常によく覚えているという事を文章に残してらっしゃいまして、この写真はつい2、3年前撮ったものなんですけど、そういう所へ行くと、これが山国、信州とそこに暮らす素朴な人々との初めての関わりだったという事で、後に「この時のスケッチ旅行っていうのが長い年月経て今でも鮮やかに浮かんでくるのである」と記しています。これが東山さんの風景画家としての原体験でした。信州が東京から近かった事もあってでしょう、自然への深さに惹かれて以後も大学時代を通して信州へスケッチに来た。

大きな作品になった取材地も、信州には沢山あります。これは長野県の地図、真ん中に諏訪湖がおへそみたいにございまして、北のほうに善光寺などのある長野市がございます。真ん中に松本があって、向って左側に穂高ですとか、上高地があります。学生時代どんなものを書いてたかという、最初はですね、安曇野の村を描いた夏の日という《夏日》という、こうした作品を描いてらっしゃったり、それからこれは穂高のもっと上の方のほうですね。大

町という所の青木湖の《スケート》、こうしたものは今の東山さんのイメージからは全く違う。当時は人が沢山集まるような絵も描いてらっしゃいました。でも卒業制作は、先ほどの高校の同窓会武陽会が所蔵されていますけども、これが美校の卒業制作です。《焼嶽初冬》を描いてらっしゃいます。そしてこれは東山魁夷館が出来てから発見された、この当時の今度は長野県北部に位置する志賀高原を描いた同じような構図の《山谿秋色》という絵ですがこうした大きな、縦高さが2.3mはある作品を描いてらっしゃいました。

次のこれはですね、なにかといいますと、東京の靖国神社の祭りを描いた、サーカスの小屋を描いたものなのですが、なんでここに出したかと言いますと、実はこの21歳の頃、お兄様が結核で亡くなります。今その世代という事で一くくりにしてしまえばそれまでなのですが、レジメにもございますが、ちょうど20歳前後同じくして1年前ですけども、一村さんもお母様を亡くされて、弟さんを亡くされてます。初めて身内の死っていうもの、家族の死というものを経験されるわけです。加えて、お父様のですね、お商売というのが上手くいっていなかったこともあり、東山さんは特待生として授業料は免除してもらい、さらに自活をして大学を卒業されるまで頑張ります。何をしたかという、こういう本制作という本画、出展する作品と同時に、これを見て下さい、実は同じ所なんです。この靖国神社にある真ん中の所を絵本の『コドモノクニ』に、挿絵画としてシンキチ、東山シンキチの名前で出して、原稿料を稼ぐという事をしながら生活をされています。

大学卒業後は、東山さん何を考えたかといいますと、引き続き研究科に進んで、ドイツへの留学を目指します。当時は画家の留学先といえばフランスだった。もっといえば、日本画家がヨーロッパに留学するなんて事は無い時代であったといいます。しかし、東山さんは生まれ育ちを見ても、いわゆる都会の、それも横浜・神戸という代表的な港町育ち、洋風志向だったんですね。とにかくヨーロッパに強い憧れを持っていて、とにかくヨーロッパから日本を見たい、でも私が行くのはパリではなくて北方をイメージするドイツだと、ドイツで美術史学を体系的に勉強したいんだという事で、ドイツを選ばれて2年間分のお金を用意周到に蓄えてから行くんですが、その頃に魁夷という号を自分で名乗り始めます。それは公式見解では「東山というのが非常に面構えとして字数が弱いので厳つい魁夷という名を付けたまでのことです。」という事をおっしゃっているんですが、文字の意味をよく考えてもらえば、「えびすのさきがけ」、東洋人の先駆けとして、非常な気概を持ってヨーロッパ、ドイツへ切り込むぞというので付けたんじゃないかというふうに考えられるわけなんです。渡航にも、しっかり計画を立てて、普通にヨーロッパに行ったらお金がかかっちゃいますので、伝手をたどって貨物船の船員として、船に乗せてもらって、さらにはこの写真のように、シンガポールで荷を降ろしている時間にいろいろ見て廻ったりして、その時のシンガポールでの見聞をですね、「旅の兄より弟へ」という弟さんへ実際に書いた手紙も雑誌に投稿して原稿料としてしっかり稼ぎながら、旅を進めるといった具合なんです。留学に際しては、今幾ら貯蓄があつて、こうこうこういう風にお金を使いますから、こんな風に生活ができるんでどうぞご心配なくとご両親に手紙で報告して、だから心配しないでねと、何度も細やかに連絡しています。物凄い几帳面な方だというのが解ります。これは旅のスケッチで長野県に寄贈していただいたものです。ヨーロッパの風物をスケッチしています。ご本人もおっしゃっていますけど、日本画へ迷い込んできた自分だとおっしゃっていますが、そういう物を描いています。モンマルトルのスケッチも頂戴しております。ドイツにはですね、都合2年間居まして、2年目からは2二年、ドイツと日本の初めての国費留学生に選ばれて、後2年勉強していいよという事になったんですが、途中でですね、帰って来る事になるんですが、その前に

ちょっとこのハガキ、ご両親宛のものです。「大学の講義室は映画館のようですよ。男女共学です、僕の後ろの人は耳が大きくて良く見えない」って書いてありますが、あの真ん中に一番後ろの真ん中にいて耳が大きく描いてある人が東山さんです。そう思ってですね、東山さんの絵を見て、自画像とか写真を見ていただくと、写真を見ていただくと耳が凄く大きいんですね。本人もそれをネタにして小さい子に触らせたりしてるんですけども、正に今みたいにスライドで真っ暗な中、大学の講義を受けている様子をイラストにして、ご両親に送ってる。物凄くマメにご両親に心配させないように、こんな事をして過してらっしゃいます。

それから大学の講義がない時に、一年間最初はドイツ語から勉強をして、それから美術史学の勉強に入るんですけども、休みの期間はヨーロッパ中を廻ってですね。いろんな史跡や美術館に行って勉強をしています。これがその一コマ、正にローマの休日、26歳の時の写真です。彼はイタリアそれもフィレンツェに行った時に、ミケランジェロやレオナルダ・ダ・ビンチの作品を見て、才能の違いに圧倒され、自分は道を間違ったんじゃないかと、絶望したといいます。

東山さんは、非常に勉学も優秀で、それこそ一村さんが言うように、出世するタイプのスマートな人で、世渡りが上手いといいますか、ドイツ語の頼まれたものをラジオ放送で日本に紹介するとか、そういう物も如才なくこなしていたんで、そのまんま学者・研究者にならないかという誘いも受けてたらしいんですね。僕は画家には向いていないと、落ち込んでいた時に、これは彼の大学のノート、ドイツ語で書いてある講義ノートです。ここに受胎告知の場面の落書きがあります。これはフィレンツェのサンマルコ修道院にある初期ルネッサンスの代表作、フラ・アンジェリコの《受胎告知》を模して描いたと思われます。東山さんはこの絵に救われたと記しています。それは、ミケランジェロとかレオナルドの絵を見て、圧倒されて絶望している時、修道院のフランジェリコの絵を見て、穏やかな庭の緑や青の表現、それから物静かな人体、表情の表現に慰められて、こうした絵なら自分も日本画家として描けるかもしれないと思い、画家の道に踏みとどまったといいます。

そして日本に帰ってくると、日本の古典の勉強、造形的な感覚っていうものに関心が向いて来る。自分がヨーロッパに行ってみて、やはり日本っていうものを知らない、文化を知らないっていう事に気がついた。いろんな研鑽をつんでさらに一年勉強をしようとしていた時に、お父様が危篤なんで帰ってこいというご連絡があって、やむなく2年で帰国をいたします。でもその2年間蓄えた、さまざまなその見識をもって意気揚々と帰国を果たすわけなんですけれども、先ほどのそのリーフレットのセルフガイドにも書いて御座いますが、正に帰ってからの十年というのはですね、苦難の時代でございまして、展覧会にはどんどん作品は出すけれども、全く入選しない。実際、留学する前にですね、その友達や先輩から忠告を受けたというんですね。日本画家がそんな海外に行くということは、日本画家内でのヒエラルキーの中でのその順番を踏み誤るよと。帰ってきてみると、その忠告どおり、自分の同期で卒業した人達はどんどんその良い展覧会の良い賞をとっていくのに、自分を出しても出しても入選もしない。焦っている31歳の時ですが、ついに弟さんまで結核にかかってしまいます。これは何かと言いますと、弟さんに送った冒険活劇マンガのハガキです。この小さな男の子、バラバルトというのですがバラバルトがアラビアンナイトみたいにですね、こう怪物を倒していくというのを一番最後のハガキにも「お知らせ新吉先生の大傑作」と書いてありますが、そういうものを29枚にわたって描き、頑張ってと弟に送っています。これはこれまで、東山さんのオリジナルだと考えられたんですけど、数年前に私の前任者が、絵本

だったバラバルトのドイツ語原本を見つけました。東山さんは、児童文学にも非常に興味があって、自分が挿絵をやったものですからそういう資料もドイツで随分集めて研究をしていたみたいです。そうした資料を皮肉にも弟の為にですね、つかっていたわけです。

それからお父さんが、命は取り留めたんですけれども、商売はだめになりまして、東山さんが店の破産を全部自分で整理をすることになりました。帰国後の10年は、そういう生活だった。唯一の明るい話題は32歳の時に東山すみさんと結婚されるわけなんですけど、この時は東山さん、東京の鷺宮に住んでたんですけど、新婚のお手伝いに、神戸から東山さんのお母さんが出てきて、生活を始めたおとたん、今度はお母さんが倒れてしまいました。ですから、すみさんは新婚生活どころか、いきなりお母様の看護も担ってという生活だったそうです。東山すみさん、旧姓川崎すみさんは、どんな方かといいますと、日本画家一家のご長女でした。お父さまは、小さな虎と書いて小虎という川崎小虎という日本画家です。東京美術学校で指導された他、武蔵野美術大学の名誉教授もされた方です。すみさんの弟さんお二人も、日展の画家で、川崎鈴彦さん、春彦さんとおっしゃいます。姪御さんも画家です。すみさんご本人もずっと画家を目指していたといいます。それでご本人の談なんですけど、結婚か絵を描く道かと、常に縁談を断って、断っていたら行き遅れてしまった。ある日誰なら良いんだという事でお父様が問いただしたところ、ポツリと東山さんなら、とおっしゃった。ところが当時、すみさんは東山さんに会ったことがなかった。何で知っていたかというのと、美術展で作品は見ていた。この作品の人なら良いと、作品に惚れたというのですよ。一方、東山さんは、電車に乗っている時に、お友達から「お前結婚するは気ないのか？」と言われて「あるよ。あるけど自分はとても結婚できる余裕はない。」そしたら「川崎先生がね、君の事を呼んでいる」というので、真面目な東山さんはすぐに川崎家へ行って、「私には本当にありがたい話ですが・・・とても余裕がありません。」と申し上げたら、川崎先生がにっこり笑って、「画家というものはね、若いときにその位苦労しなきゃものにはなりませんよ。」と言ってきて、ご本人同士合ったこともないのに、結婚が決まったと記されています。時代が時代なのかも知れませんが、すみさんというのはそういう思いで奥様になられた。二人三脚でのスタートが、東山さんの一番の苦難の時代から始まります。

その後も、出せども出せども大きい賞には入らなかったといいます。しかし、日本画院展というのが昭和14、15、16とあるんですが、そこで第一席、一等賞に選ばれるんですが、東山さんの当時のスクラップブックに「オメデトウ ヤマダ カトウ」と記された電報が貼られてるんです。これは何かというと、一村さんも親交が深かった加藤栄三、山田申吾という正に同期生がですね、その時の電報をくれたというのをちゃんと自分のスクラップブックに貼ってある事が、今回の百年展の調査でわかりました。東山さんは落ちてても、落ちてても、結城 素明先生に「とにかく元気を出して、自然を心の鏡にして見ておいで」と言われながらいろんな所を旅して、絵を描いたといいます。これは北国街道沿いに長野に来たときのスケッチですし、これは小諸というやはり長野県内のスケッチ、それから昭和18年には満州に行って、これは万里の長城ですけど、中国の、そこまで行って写生をするという事で、ひたすら苦難をバネにというか一生懸命絵を描く生活をされていました。

ところが17年、この作品の前の年に、遂にお父様も亡くなられているんですけども、あいかわらず寝たきりのお母様と奥様が頑張るんですが、ついに昭和20年の7月に召集令状がまいりまして、熊本ですね、隊に入隊します。そして迫撃兵という、ようは爆弾を持って戦車に体当たりするという訓練を何度も何度もするという日々だったそうです。ある日、空襲後の熊本城の片付けをしてですね。その帰り道、兵舎まで走って行軍するという時に、

東山さんは、とにかく泣けて泣けてしょうがない。自分が、なんで俺泣いているんだろうと、よく考えると、さっき片付けに行った熊本城からふっと見た、阿蘇山に続く肥後平野を見たその光景が—今は、こんな風に熊本の肥後平野から阿蘇を望むとこんなふうになっちゃっているんですけども—忘れられなくて泣いているんだという事に自分で気がついたというのですね。走りながら。その景色は正直言って、世界中を見てきた東山さんにとっては、ありふれた風景だったというのですが、なんで泣けるんだろうと考えた時に、描いてやろうという眼じゃなくて、画家どころか命すら無いという覚悟の、いわゆる末期の眼で風景を見たから、こんなに何気ないこの風景に、木々のきらめきとか風のそよぎに、俺は感激しているんだという事に気づいたというのですね。もし生きて帰れたら、こういう気持ちで絵を描きたいと強く思ったと記しています。

そして8月15日を含め、ご本人は奥さんとお母さんが疎開していた岐阜に戻ります、高山に戻って暫くは、お母さんも小康状態を得て、一緒に暮らすんですけども、この年の11月に最愛のお母様も亡くなります。そして東山さんは12月、奥様を山梨に、ご実家の川崎家が疎開してまして、其処へ残して上京して、そこから市川へ大パトロンの中村家へ仮住まいをしまして、制作を再開しました。春、第一回の日展に出品しますが、落選をしてしまいます。この3月、同じ月に最後の肉親であったその弟さんの泰介さんも亡くなり、これより天涯孤独の身に、奥様はいますけど、自分の、東山家の肉親を全て失ってしまう。それで間借りしていたその市川に奥様を呼び寄せて、新生活を始めるんですが、その冬枯れの山、鹿野山という山へ登ったときの印象が、《残照》として翌年の日展に出品されます。天涯孤独になって、出した絵も落ちちゃった、そんな中で冬枯れの鹿野山の上に登って、じっと夕日が沈んでいくのを見ている。《残照》の構図は再構成されたものなので、向こうに山は見えないんですけども、その時に、絶えず変化していく事が、生きているという事じゃないかと悟ったという。不変というのは死でしかないというふうに強く思ったというのです。今僕はこの冬枯れの木々やざわめいている草と一緒にいるんだと。こういう思いを熊本で見たあの末期の眼の気持ちで、絵を描いてみようという事で、翌年、鹿野山に登った思い出を《残照》という作品にまとめました。それが、間借りしていた中村家の事務所の2階がですね、狭かったんで、搬出する時に絵が出なかったんだそうです。ですから作品を半分ずつに分けて、出したといいます。それが特選という荣誉に輝きます。それが同じ年、先ほども話しがありませんが、一村さんも、川端龍子主催の青龍展に入選をするという事で、ここで戦後のスタートを共に切るという奇遇なやはり運命のめぐり合わせがありました。この年からですね東山さんはいわゆる画壇の寵児として、坦々と階段を上がっていくわけですね。

その次の年の日展に《郷愁》という、信州を描いた、信州のおへそみたいにあった諏訪湖へ流れている、上川の堤防沿いの道です。今は道路が舗装されちゃいましたけど、そこをずっと歩いて、いわゆる日本の故郷っていうのを描きたかったという事で描いた作品です。

《残照》《郷愁》みたいな作品だったのが、ここからいきなり《道》で全く作風が変わります。それはどういう事かという、ここから以後はですね。いわゆるそのままマークになるような、全く簡素なデザインみたいな構図になっていきます。その細やかな色彩ね、これは本当に本物で見てもらいたいですね。本当に細やかな紫ともいえぬ、茶色ともいえぬっていうようなものをこう、本当にいろいろに見えるようなものに塗り重ね、塗り重ねた、そういう所で深い精神性を備えていくような絵。それが東山さんのいわゆる東山芸術といわれるスタイルなんですけども、そこがここからこの作品から始まります。これは夏の朝のすがすがしい道を描きたかったと、これから行く道だと思って描いていたら、来た道かも知れな

いって思ったという事を書いています。これが当時の実際の取材地、これは青森県の種差海岸なんですが、今はこんな風にはなっていないんですけども、向こうに灯台が見えていますが、実際灯台の有る絵も東山さんは描いています。どんどんそういうものをそぎ落としていって、さきほどの一本の「道」を描いた。こんな単純な構図の作品、馬鹿じゃないかと言われるんじゃないかって、ビクビクしながら本人は日展に出したと記しています。そうしたところが、昭和25年という戦後日本が復興してまさに成長期に入るといふ時代を象徴する作品として好評を得た。日本人がこれからの道だ、これから目指すんだっていう気運と正にマッチして、日展で非常にこの絵が人気を博した。私、この時に日展に見に行ったよという方が信州にはいたんですけども、正にここでスターダムへ登ったというか、東山さんは本当に大衆の共感を得る画家として、確立をします。

これは2年、3年経っているんですけど、続く代表作としてこの《たにま》というのがございます。信州の野沢温泉という所の雪解けの小川を描いたと言われているんですけど、じつはこれは十数年前、《たにま》は45歳の時ですが、33歳の時、昭和16年に《自然と形象》という先程、山田・加藤両氏からおめでとうと貰ったという三部作のうちの一つがこの《雪の谷間》で、同じモチーフを描いています。東山さんは「この絵を戦後あるものが私自身の中に加わって、もっとモチーフをいかして描ける気持ちになったので、もう一回描いたのが、《たにま》です」とおっしゃっています。そのあるものというのは何だろうと、考えました。本人の公式見解は、いっぱいこういうスケッチを溪流の中に入って、そういうものと東山さんが大好きな古典である、これは平安時代の料紙装飾の最高傑作と言われている、本願寺本、現在は西本願寺本三十六人家集というんですけども、この継紙の意匠。これのことをですね、東山さんは「実在の風景の感覚的な表現だ」というふうにいっている。それぞれの和歌に相応しい、いろんな場面がある料紙なのですけども、そういう水流ですとか、破った紙をこう継いだの形ですよね。そういう物とかあるいは琳派の水流。代表的なものがMOA美術館にあります、国宝の光琳のですね、紅白梅図屏風ですけど、こうしたものを元にしながらこういう《たにま》を創った。更にこのカーブをもっと力強くするためには、土器、弥生土器とかですね。それから中国の青銅器なんかも元にして、カーブを作ったんだというのが本人のいろんな所での公式見解なんです。でも「あるものが、加わって」というのがイマイチ、ピンとこない。じゃあ折角なんでと百年展の調査のときに探してみようと考えました。西本願寺本三十六人家集というのは東山さんはその後、東宮御所ですとか、壁画なんかを頼まれた時には、この家集の意匠をそのままモチーフにもしてるんですね。ならばということで、家集の全場面を探りまして、何か似た要素がないか、一つにはこうした吉良、これはちょっと複製なんですけど、この吉良の真っ白な中に継紙で、よく見ていただくと船が、青い藍の中に浮かんでいるんですけど、川、白地の白地の部分と青、川を表すという意味では、こういうものがそれ該当するかなあ、でも形は全く違うよなというんで、なんか別に川に拘わらず、形を探してみようと思って探したら、この場面がありました。これは夜のとばりに雁がずーっと飛んでいくっていう継紙の所を前と後とで、全然紙を変えてあえて表していますけども、実はですね。これをひっくり返しますと、皆さんのお手元のセルフガイドにある、《たにま》を描く一年前に《秋風行画卷》という絵巻を描いています。この真ん中に川が出て来ます。この川の形とひっくり返した、反転したカーブの凸凹は数が同じなんです。多分この初めて絵巻を描こう、この古典の勉強をしようと思って、古典の勉強をしていく時に、そのどういう風に次の場面に展開するかと、例えば絵巻でいえば、霞の雲にして次の場面にしますよね。そのようなことを全く経験が無いので、全く違う場面展開

をするときの、参考に多分川の形として、まず使ったんじゃないかと思うんです。で更によく見ると、ちょっと先程の反転した形を右に傾けてもらおうと、《たにま》の形そっくりなんですよ。ですから東山さんのあるものが加わったというのは、まさにイタリアから帰ってきてですね、川端康成が後で出てきますけど、川端さんと同じで、戦前と言うのは国粹主義の宣伝に芸術家はつかわれていきますので、日本の古典の勉強っていうのは、あえてしなかった所があったんだろうと思います。それがヨーロッパに行ってみて、自国の文化っていうのを、大事にしなくては日本画の画家として生きられないというので、戦後、いろんな形を貪欲に勉強して、またその頃、旧家から、次々と日本美術が外にでできますから、それを見たり、買ったりしていった。《たにま》は戦後8年たちますけども、そういう古典から勉強した形を、自分の感覚に備わるものを、ベースとして位置づけ、一方ではより深い自然鑑賞を実際の山河に出かけていって、本当に雪解けの小川がどう流れているのかということをデッサンで得て、それらを一緒にしてできたのが《たにま》ではないかとおもいます。これもほんとうに紫とかピンクとかですね、凄いの色の沢山の色の雪があって、川の所には金箔が貼ってあるんです。この一見マークみたいに見えるデザインの中に、複雑な色彩が透けて見える所に深さというのを感じる。しかしそこには古典の意匠の伝統が踏まえられている。

それから、全く同じ事をですね、この芸術院賞をとった《光昏》という、これも我が信州を題材にさせていただいた、向こう側が黒姫山、真ん中の真っ黒なのが野尻湖で、秋の夕日の夕映えに逆光ですね、輝く空を描いたもので、公式見解では、最初、野尻湖に来た時に、ピーカンの秋晴れの、本当に観光写真、観光絵葉書しかない天気だったと、だけど一生懸命デッサンして帰ったと、でもある年のその日展に出す作品を決める時に、もう一回これをなんか使えないかなあと、もしこれが夕映えだったらどうかなあとと思って、部分の樹木などをこのように秋に変えてですね、描いたのが今の《光昏》だと本人は言ってるんですけど、その文章の最後に「能装束なども参考にした」とあった。じゃあ、その能装束を探そうじゃないかと思ひまして、・・・・・・

《御簾に色紙桐繡文様唐織》という桃山時代の能装束物があります。その真ん中にですね、パッチワークになっているわけですよ、色紙が。こういう富士山、正に富士山みたいな山とその紫と錦のですね。こうしたものがある。実はこの年はですね。《光昏》に行きつくまでに、主山を富士山にして、作品を沢山描いているんです。背景が金地で、富士山があって、下に錦の紅葉があるという絵を26作位描いてるんですけども、その中でこれじゃどうもそのまんまじゃ上手くないと、ふっとこれ紫だったら、そして、真ん中が漆黑だったらと思いついた。そして、それはじゃあ富士山じゃないと、どこかないか、野尻湖だ、となったのではないかと思います。そのため、手前の林の部分は、取材地は箱根の姥子、富士山を描いていたときの前景をそのまま使ったというのがどうも本当ではないかという事を百年展の作品解説に書かせていただいたんです。まさにこれをみていただくと、頭の中にまず構図とか色彩っていうのが出来て、そこから実景を探しあてて、そこを一生懸命デッサンして、自然のエキスというか、景観をその自分の物にして、作品にしていくというのが東山さんの制作スタイルだといえると思います。

次は私が解説を書いたわけじゃないですが、東京国立近代美術館所蔵の東山芸術の完成作、東山作品の確立だといわれる《秋翳》という秋の影という難しい字をかく作品ですが、この単純な三角の山も、本物を是非見ていただきたいんですが、空がピンクだったり黄色だったり、紅葉した木々も凄くこう深みがあるんです。これも正に構図ありき、先にこのこういう構図を描きたくて、いろんな候補地を探して、群馬の法師温泉の裏側から見ると、そ

の山が三角に見えるという事で、そこを慌てて取材に行って描いたという。正にこの頂点、東山芸術が確立したっていうこの年は50歳で、一村さんは12月に奄美におこしになっています。ですからそのやっぱり節目節目がそのまったく方向が違うかも知れませんが、やっぱり共通点があるという風に思います。この後ですね、東山さんは、54歳の時あんまり著名人になって、多忙になっちゃって、このままじゃもう絵が描けないと、全てのシガラミを断ち切って、再生するしかないというんで、四ヶ月スケジュールをバンと空けてですね。四月から北欧の旅へ出かけます。奥さんといっしょに。それで帰って来てから描いたのが、《映像》という正に上の風景が真下にぴしっと映る、本当に神がかったような、こういう風景は北欧でしか見られないというこの水平と垂直っていうのを、描きたくていたんだというようなコメントが残ってるんですが、これもでもその転用なんですね。ちょっとそれを上に上げておいて、下に枯木を描く《白夜》、これも有名な作品です。こうしたものを次々と、北欧のシリーズを生み出します。

その後又日本の四季を描いたりという事をするんですが、これは、たまたま信州安曇野へ旅行した時の写真ですね。真ん中に川端康成、向って左が井上靖ですけども、川端康成とは昭和30年から交流がありまして、それも東山さんから頼んで、接近して。川端さんは10歳年上で当時すでに有名な方だったんですが、人にうるさい川端さんが、東山さんを非常に気に入ったというのですね。文章に川端さんが書いているんですけど、共に天涯孤独の身で戦後、戦前は全然見向きもしなかった日本文化というものを、戦後になってむさぼるようにそれを探求したと。川端さんは、ちなみに美術コレクションでも凄い有名なコレクションを持っています。国宝を三つも持っている人なんですけど、そういう日本文化のアイデンティティを備えた作品を国際的にアピールしていくんだっていう姿勢が、非常に共感していたらしくて、二人は、素敵な紅葉を見つけたといって、それを入れて封筒を送りあうような、それこそ恋人同士のようなお付き合いをずっと川端さんが亡くなるまでしていくのですが、その中で「今京都を描いておかないと京都が無くなります」と、川端さんに勧められて描いたのが、この《花明り》から始まる「京洛四季」というシリーズなんですけども、その時川端康成さんは、『古都』という北山杉の元に生れた姉妹のですね、双子の話ですけども、その『古都』を京都で執筆中で、その頃どんどん高度成長期で、電線がそれこそ山や、町屋の薨の波の上にガンガン立ったり、ビルが建ったりって、こんなの京都じゃないと、京都が無くなるから都の姿とどめおかまじ、とおっしゃったんですけど、それでその意を受けて創った連作です。これはその他、東山さんやそれから三島由紀夫さんとも面白いエピソードがあるんですけども、そういう彼らの絵本の装丁なんかも手がけております。

そんなこんなをして、一番最初に申し上げた62歳の時、唐招提寺の御影堂の揮毫打診を受けるわけです。東山さんという人は、一村さんと共通していると思いますが、一切お弟子さんを取りません。勿論奥さんがそういう下働きのお手伝いをしてくれたといえども、全く取らないのでもう百何十枚になる襖絵を62歳からですね、たった一人で描けるかという事も悩まれたそうです。それで数ヶ月悩んで受諾した後、一年間唐招提寺の勉強をして、その後構図を決めながら、全国をスケッチして歩く訳ですけども、受けると決めた時に、先ほど申し上げたこの曲が頭の中に浮かんで、連作「白い馬の見える風景」ができます。これもやはり夏の朝、本当に母との深い思い出のある「夏の朝」というのは《道》とか、この《緑響く》とか、大事な所にしか使っていないんですけど、精神性の高い作品に出てくる。これが実際の取材地。奥蓼科の小さな小さな、これがそう？って言うようなため池なんですけど、ここが舞台になってます。弦楽器の合奏の中をピアノの単純な旋律が次々に通り過ぎるとい

う、その木々が伴奏、合奏ですね。ピアノが旋律、白い馬がメロディだったわけですね。旋律だった。これは今、Vibrant Greenという英訳がついているんですが、彼が最初にこの作品につけた英語の名は、Music of Greenという題だったんです。凄く音楽を意識して創った作品だというのがわかる。モーツァルトに対する思いだったのかも知れません。でその他にもこうした信州を舞台にした作品、「馬の見える風景」では、様々な彼が旅した場所ってというのが、織り込まれております。そして一村さんが絵の批判をしたという、これが来る波にみえるかと言う風に宮崎様に言ったという《濤声》が生まれていくわけですが、日本のお寺の形式で、また後でちょっとお時間があれば説明するんですけど、北と南に六間こうお部屋があるとなると、南側に面したお部屋っていうのは基本的に色のついた襖絵をするんですね。唐の時代に律宗という教えを日本に持ってくるために、誰かお弟子さんをよこして下さいっていう風に遣唐使が行って、中国の高僧であった鑑真和上をお願いした所、鑑真は弟子に聞いてみるわけです。誰か行くか？と。誰もそんな辺境に行きたがらない。シーンとしたところ、じゃあ私が参ろうと言って、高僧自らが渡って来てくれた。鑑真和上は、皆さんご存知だともおもいますが、何度も難破してついに日本に来たときは、盲目になってしまった。鑑真和上の御影、お像というのは国宝になっておりますが、御影堂とは、あの鑑真和上像を安置するためのお堂、五間一つの建物なんです。普通は六間なんですけども、その南側が二間続きになっているところに、この20mにもわたる波の絵を描きます。それは鑑真さんが日本に来たときに、目に出来なかったであろう日本の山と海を描きたいという事で、日本のいろんなところの海を見て決めた、これも実際には俵屋宗達の《松島図屏風》というののモチーフをそのままバンと現代風にアレンジしてあるというふうに私は思うんですけども、そうしたものを創っていく。そしてその後ですね。今度北側の三部屋、どうしたかという、普通北側の三部屋っていうのは、元々そのお坊さん達がプライベートで暮らす部屋なので水墨画で描きます。南側に向いた部屋は、公式的ないろんな人と会ったり、応接で使うため、色彩のある襖絵になっています。けれども、東山さんはそれまで、水墨画って描いたことないわけですね。色で色で塗り重ねて、描くことしか出来ない作家さんなんです。それをじゃあ70近くになってどうやってやって行くかという、まず自分の得意としたこういう岩絵具、これは群青、一番高い岩絵具、群青ですけども、これをまず一色で描くってことをまずして、例えば、大きくこうして《夕静寂》のような大作を作っている。これも2.3m位ありますから高さ。その後、群青を焼いて黒くして、白黒の絵を創っていく。それから、下地をしっかりと作った上に、薄墨を幾重にも重ねながら描く、東山さん独自の水墨画を描いていった。

《揚州薫風》という墨の絵は真ん中の北側に向いている部屋ですが、鑑真和上像が正に、安置されているグルリをですね。四方を鑑真和上像の鑑真の故郷である揚州という柳の国の風景で飾ったわけです。その場面ですけども、東山さんの水墨画っていうのは、どんなのかというと、まず紙にドーサをひいて、胡粉を主とした白いですね、白系の下地を全面に塗ったんです。普通、水墨画って紙の上とか、絹本の上、絹の上にそのまま筆線で、書道のように墨で描く、一村さんみたいにですね。筆の力量、技術でもって描いていく。というのが普通、私たちのイメージとする王道の水墨画なんですけど、東山さんはそれができない。70になってどうやったかという、薄く薄く、のびした墨は山口蓬春からいただいた大切な墨でした。もとは、蓬春が結城素明にプレゼントした昔の中国の墨でしたが、素明先生が亡くなった時、お弟子である東山さんも一緒にお返しに行ったんです。蓬春は、それではじゃあ君にあげるよと言って、それを東山さんに下さった。そういう曰く因縁のある大切な

墨を薄ーく薄ーく、すってのぼしてですね。ドーサ、胡粉をひいて、下地を作って紙に墨がにじむ事ない状態にしておいて、薄ーい薄ーい墨をですね。何回も何回も重ねながら、木を描いたり柳を描いたりしていくわけです。ですからこれは水墨画、確かに水と墨で作ってあるけど、東山さん独自の水墨画表現なわけです。そうやって70にして一人で挑戦をして全作品を72歳でやっと完成をさせてるわけですが、もしかしたら本当にその一村さんがおっしゃったみたいにですね、これは来る波じゃないと、引く波だと、ひよっとしたら本当に引く波、引き潮の波なのかもしれません。

この後ですね。長野県でいうとその《静映》という私が勤務しておりますホールですが、当時東洋一のホールだといって、27、8年前に作ったんですが、その時の中ホールの緞帳の原画として初めて長野県として、東山さんに依頼をして作って貰ったのがこの原画です。これは信州の希望湖を取材地としてかいたものです。そこから始まって1990年平成2年に、長野県に家蔵の全作品の終の棲家が出来るわけですが、その東山魁夷館が完成した年の日展に出したのがこの《行く秋》という作品です。これも本当に綺麗な作品で、私は大好きな所蔵品なんですけど、これはですね、ここに本人のコメントがついて「行く秋を誰が寂しいといったのか。私には壮麗な生命の燃焼に思える」とその秋というものを非常に肯定的に捉えるんだと、美しいんだということを歌い上げた文章がついているんですが、この「生命の燃焼である」という言葉と、落ち葉というモチーフ、それから金と黒、黒じゃなくて本当はこげ茶なんですけど、みると金と黒に見えるというこの色彩というのは、東山さんが私淑していた菱田春草の傑作、《落葉》、《黒き猫》を連想させます。これ実際に《たにま》を描く一年前に《霧》という作品で《落葉》を抽象化して描いたものがあるんです。金と黒というのは、まさに《黒き猫》という春草の最後の作品の象徴的な色彩です。東山さんは、昭和30年代に春草に関する随筆を書いていて、そのなかで「落ち葉」と「黒き猫」を、30数歳で亡くなった春草の、夭折した天才の生命の燃焼である、と述べています。それが齢80にして、自分が私淑する春草の故郷信州に、自らの終の棲家、自分の作品の終の棲家を作った年に、齢80の生命の燃焼として描いたものじゃないかな、と。この作品の中には菱田春草へのレクイエムも入っているんじゃないかと私は考えています。ここも、一村さんが横山大観の方が好きだということと対比するとやっぱり、東山さんは春草で、後でちょっともしお時間があれば説明をしますが、水に映るという表現、非常に春草が好んで用いた表現なんですね。春草のことを本当にいろんなところで、最も好きな画家だったと東山さんは言っていて、自分の内面をですね、こう何気ない風景の中に込めてそれを知的に深く表す点を評価しているというような事を言っています。自分も、そういう表現をしたかったんじゃないかと思います。

《夕星》。これもやっぱり水に映っていますけども、下のセルフガイドの答えをみないで、見ていただきたいのですが、上の風景が下に映っているはずなんですけど、なんか一つおかしいところがあるんですが、どこかわかりますか？そうです、下に星が映っていないんですね。本人はね、これは其処にもない夢の中の風景だと、見たことのない風景だと言っているんですけど。夢の中というのをそれで表しているのかなと思うのですが、これがコメントなんですけど、「これはどこの風景と言うものではない、そして誰も知らない場所で、実は私も行った事がない。私は今まで随分多くの国々を旅し、写生をしてきた、しかしある晩見たゆめの中のこの風景がなぜか忘れられない。多分もう旅に出る事は無理な我が身には、ここが最後の憩いの場になるのではその感を胸に秘めながら、筆を進めている」と書いてらっしゃるんですが、これは私達は嘘だと思っています。何故かという東山さんは

全部の作品をお子さんがいらっしやらないからと、私の作品を育ててくれた故郷、長野へと寄贈して下さいました。それと同時に自分の美術館が見下ろせる山の中腹に、善光寺の墓所があるんですけども、そこに自分と奥さん、それから自分の兄弟、お父さん、お母さん。それから瀬戸内から出て東京で活躍したというおじいちゃんの新吉さんとおばあちゃん、つまり瀬戸内から出てきた東山家の遺骨をみんな移して東山家の墓所を作りました。そして設計者は東山魁夷館を建てた谷口吉生です。彼は、数年前にニューヨークのメトロポリタン美術館の改修をした日本を代表する建築家です。その谷口さんに墓所の設計も頼んでます。非常に簡素なシンプルで素敵な墓所ですけども、その墓所を墓石をお参りして顔を上げると、この作品の上半分の景色がみえるんです。お水があるというのは正に架空なんですけど、この画面の上半分の風景が正に墓所へ行った人にはわかる、あらそっくりじゃない、と思う。違うのは杉の木の数。本当は六本あるんです杉の木が、なんで四本なのかという問いに私たちはお父さん、お母さん、お兄ちゃんと弟なんじゃないかなあと思うんです。そして水っていうのは、東山さんが生涯繰り返してきた構図です。水に映すことを、倒す影と書いて、倒影というふうに呼ぶそうなので、倒影構図というふうに呼んでいるんですが、上下や左右相称のいつてみれば本当にちょっと間違えば、馬鹿じゃないのという絵になる微妙なバランスをついて、落ち着きを出している、そしてそれは東山さんが好きだったドイツのロマン派の画家フリードリヒという人がいるんですけども、そのフリードリヒに対して、あのこういうシンメトリーの構図っていうのはやっぱり宗教でもそうですけど、荘厳さとかですね、落ち着きっていうのを与えるんだという事を言っているんですが、そういうものを全て最後のこの絶筆にも込めて描いている。これが最後の作品。それは誰もが墓所に行けば、信州へ来てこの作品を見て、夢の中の風景だなんて書いてあるコメントを読んでですね、じゃあお墓に行こうかと、誰もが気がつく。ここじゃないのと。でも誰も行ったことがないとあえてそこで書く、書けば誰かが、いやそうじゃないという事を計算して、没後でも永遠と話題がつながるといような、こういった計算をして、訴えたいものがあつたのではないかと思います。この百年展をやっている途中で、神戸のある本当の一般の方からお電話がありました。夕星（ゆうぼし）とレゾネではよませていますが、これはユウツツと読むのではないかと。ギリシア時代のギリシアの女流詩人、サッホーという人のユウツツという詩に、夕星つまりあれはビーナスですよね。あれは金星です。全てのものは母の元に返すといような内容の詩があるんです。その朝放した山羊や家畜を返し、そして母に子供を返す。まさにピッタリの内容でした。《夕星》には、まだまだいろんな意味があるのでしょうか。いろんな要素を多くの人に言ってもらうように、まだ発信を続けている作品ではないかと思います。

今回、私も関わらせていただいて、正に東山さんの導きの通りのオリエンテーリングみたいですね、見つけてきた事ができたと思うのですが、東山さんは、そういう事柄をあえて作品や文書に仕組んであるのではと思います。作品の特徴というのは今申し上げた通りです。そして目指したものというのはこの投影構図にまさに見られる新しい日本画、そしてそれは日本画の国際性、日本画というものをどうやって国際的にアピールしていくかという事にもつながります。まさに例えばこの洋風に見えるこの《窓》なんて、そういう岩絵の具の特徴を生かした、材質そのままにできるもの、これは長野県の代表作ではあります。それから、目指したものの本質というものは、ここに書いてある文章がそのままあてはまるんじゃないかと思うんですけども、普遍的な存在意義というものを絵に込めたかった。

「その孤独な部屋の真ん中に鏡があつて、窓の外の世界が映るのを部屋の住人は見つめる、直接窓から外をのぞくという事にはあまり興味を示さない。窓の世界は架空の世界であ

り、真実は鏡の中だけに映る。この部屋に住む人は、鏡の中の真実を各自の方法で形象化しようとする。自分の言葉で語ろうとする。それはやさしい仕事であるはずはない。しかし孤独な密室の中でのその住人自身のための、作業であるにもかかわらず、いやそれだからであるからだこそ、そこから生み出されるものは窓の外の世界での普遍的な存在意義を持つといえる。より深い真実に触れることを人は願うからである。」という福永武彦のある文に対するこれは回答として、全集のところに出した東山さんのコメントなのですが、その孤独な密室な中での作業、ご本人の絵、自分自身の絵の制作のだけれども、だからこそ生み出されたものは共通のですね、普遍的な存在の意味があるんじゃないかと、まさに心象風景を共感を持って人々に届けたいという思いをお持ちだったから故に、あえて単純化して象徴性っていうふうに言われるんですけど、そういう絵を描かれたんじゃないかと思います。本当に正にもうお坊さんのような、きっちり決った日程で、どこかのそこの長野の田舎の学校の先生が電話をかけたって、きっちりそれに答えて、一週間以内に電話をしてくれるという、手紙を書くというくらいにもうお坊さん以上に律した生活を送られて、90で終えられた人生なのですが、東山さんを語る時にやはり対極をなす一村さんというのは、ある意味本当に共通をしていると思えますし、一村さんの研究が深まる事は、やはり東山さんというものを又見つめなおす大変良い勉強になると思っております。ですから本気でもっと奄美の皆さんに東山魁夷という人がただの権威のですね、そこで栄華を極めて亡くなったという人物ではなくて、やはり同じようにそのほんとうに真摯に生きた人、絵でもって生きた人であった人であって、それを知っていただいて、いつか信濃美術館の東山魁夷館の本館というのがございます。ここで田中一村展ができればいいな、そして逆にこの田中一村記念美術館で東山さんのこうした態度、ある意味では一村さんにも負けないくらい、孤独の中で、生涯を暮した人となりや作品を見ていただければいいといいなというふうに思っやみません。本当に今日はお忙しい中お時間を頂いてありがとうございます。又どうぞいろいろ教えてください。ご静聴ありがとうございます。

前村・伊藤さんどうも有難うございました。最後の墓所からの風景と言うのを僕はでるのかなあと思ったんですけども、じつはですね僕はすごく勇気をだして、美術館に電話をしたことがあったんです。田中一村記念美術館の学芸員と申しますけれどもという事で話を聞きたかったことは、著作権の問題だったんです。

その事は多分知らないと思うんですけど、凄い勇気がいりました。何故か知らないけども凄い勇気がいりました。そして長野県の諏訪にあるハーモ美術館で一村展をしたときに、一緒に講演をしていただいて、その時諏訪から長野に車に乗せていただいたんです。それで話を伺って、次の日に美術館まで案内していただいたんですけども、墓所までつれて行ってもらいました。僕は伊藤さんとはもう十年来のお友達みたいな気がして、素晴らしい方で、本来ならば東山家とも非常に親しいし、今東山魁夷さんと言っていますけども、東山魁夷先生と呼んでいます。我々は一村さんというふうに呼んでいますけども、墓所に行ってみせていただいて、すごく彼女の人間性も素晴らしかったんですけども、是非訪ねて行って、墓所まで行ってみてください。正に言われた風景、多分来てくださいという意味で写真を出さなかったんじゃないかなあと思うんですけども、行ってみたいと思います。ちょっといろいろ思うところがあって、僕も感想を述べたいんですけども、せっかくですので、もうちょっと近いんじゃないかと思うので是非質問をお聞きしたいと思います。久保井さんなど凄いピンピン感じる場所があるんじゃないかなあと思ってですね。真剣な絵を描く人間にとっては非常に今日の話はですね、ガンガン感じる場所があったんじゃないかと思うんですけども、こ

それを機会に是非一村さんの世界に浸っている我々にとっても、お聞きしたい事があるんじゃないかと思うのですが、どなたかないでしょうか？

保・・・どうも保と言いますけども、あんまり絵には詳しくはないですけども、今日は有難うございました。二点ほどお聞きしたいんですけど、先ほどの中で、一村さんは東山さんを意識していたという事だったんですが、逆に東山さんは一村さんをこう意識した事があるのかどうか、なんかその後の消息を知りたいとかそんなのがあったのかどうかというのが一点と、伊藤さんが今度は又一村さんに対しての感想ですか、絵に対する出会いとか、一村のその生き方とか、どう感じておられるかちょっと教えてください。

伊藤・・・ここで座ったままでいいのでしょうか。恐縮ですが、一村さんの事っていうのは正にこちらの中野さんですか、が取材された時に、ここにレジメにも書かせていただきましたけれども、亡くなられて回顧展をしたいという事で、中野惇夫さんが東山家に1979年、昭和54年にお電話をされた時に、「そういう方がいらしゃったかも知れません。ちょっと待ってください」とおっしゃって、美校の名簿を見にいった、それでいらっしゃいますと「確かに同期でいらっしゃいます」と、「修という字が書いてあるので、中退をされている、途中でお辞めになったんじゃないでしょうか」という事はおっしゃって、その中野さんがこういう遺作展をするといったら、「苦労された方だと思われますので、是非遺作展をしてあげてください」という丁寧な回答があったという文章を拝見するしか私も解りません。ただ、山田・加藤の電報をそこに載せさせてもらったのですが、あれだけ同じ千葉県、市川市と千葉市にいて、そして加藤さんというのは、実際市川市に住んでいらしゃって、その一村さんの所にも出入りしながらいたわけですから、なんらかしら其処に関わりはあったと思います。ですからこれから正にそういう所を調べていきたいなと思います。

それで正直な所を申しますと一村さんに対してどう思うかというのは、言っているのかですね、実はですね、実はこちらが改修工事に入るというタイミングが、生誕百周年にありまして、あの時にもしかしたら館が閉鎖になって、一村さんの作品が宙に浮くかも知れないという話を伺った時に、是非、もう一つの百年展を長野県信濃美術館、長野県でやらせていただけないかというふうをお願いしたんですが、個人的には、一村さんの作品に非常に惹かれるものがあります。だからといって、太陽と月に譬えると、東山さんが月で一村さんが必ずしも太陽かという、そういいきれものでもないです。やはりでも横山大観と菱田春草をそれぞれが私淑したというのは、そのまんま、やっぱり彼らの生き方に、当てはまるんじゃないかなとは思いますが。ああいう激しい生き方、同じ鋭い繊細な気持ちを持ちながら、それをどういう風に人生で展開させていくかと、展開の仕方が、一人は都会的で、スタイリッシュに上手く世の中を渡りながら、でも決して気楽でも、安らいでもなかった。孤独な作業の中で結果として多くの人と共感を持つことを願って、生きていかれたし、もう一人は、どうしてもその曲げられない自分の信念というものを、世の中と折り合いをつけずに生きていく。それも意地にも強く生き抜いていく、それも生き抜いちゃったっていう素晴らしさがあると思います。結果、十年しか、個人美術館が出来るまでには違わないわけですから。まだまだこれから二人の作品の接点とか、繋がりとかその対決というのは、まさに代々つながれていかれるんじゃないかと思っております。今後ともそういう現場に関わらせていただけたら有難いなと、そんな風に思っております。

前村・・・補足します。実は挨拶に行ったときに、学芸員の方が二人出てこられたんですけども、一村展したいよね。と話をしていたか叶うかなあという事で、やりたいと言ったら皆さんぱ一つと手を挙げたんです。

伊藤・私、担当させて、イヤイヤ私がやるよと言って。

前村・こんな嬉しいことはないですよ。だから実は増築が始まる時に、凄い重機が入って、騒音が起ると、閉めなければ美術館の慣例としては閉めなければならないだろうと、見れる状況ではない、では一年近く空けておくのであれば、その希望がある長野ですれば、我々一村さんがどう思うかという事を考えて、一村さんも本望じゃないだろうかと思ってそう言いだしましたけど。申し訳ない事でそれは実現しなかったんですが。実はそういう思いを実は東山さんの学芸員さんたちはもっていて、それ程評価していただいたという事は、凄くその後の自分にとっても自信になったという事で嬉しい話でした。

伊藤・それでも一つ補足すれば、ご存知かと思いますが、小林照幸という長野市出身の方が、一村さんの小説を書いているらしいです。そういう意味でも一村さんを身近に感じていますし、少なくとも私達長野の県立施設の学芸員は、願わくばいつの日にか、いうのはずっと思っております。

前村・そういう事です。はい、じゃあ。

久保井・先ほど私に振ってきたのかなあとと思って、それで黙って帰ろうと思ってたんですけど、実は私も学生時代から作品を大家ですけども、近代美術館とか、奄美に帰ってきてまして、県展で県の美術館で日展の巡回展とか、そういう時にも見せてもらいました。「落ち葉」ですかね。ああいう作品とか、それとやはり形を追っかけているなど、「道」みてもですね。これはよく見かけたなあというのと、形を追っかけていた頃という事で、非常に僧侶みたいな、それととにかく体力的にこう興味をもたれて、作品創りをなされていたという事で、11年前にアートトップの方で、これは残照ですね。あの作品が義理の弟さんであります、川崎コトナさんですかの家で見つかった。それが非常にこう素晴らしい作品で、学生の頃の作品で、その作品が信濃美術館の方に寄贈される予定という事で、あの作品はどうだったのかなあと今。・・・その作品は凄く私も非常に関心がありまして、一度見たいなああと、私も昔ちょっと、小学校の頃と又大学の頃に長野の方に行きましたけども、美術館はまだなかったと思います。碌山美術館には行った事があります。そういう事で。

伊藤・今お話をいただいた《山谿秋色》という、それこそ長野オリンピックのメイン会場になった志賀高原という新潟県境の方にある、昔からリゾート地で、結城素明先生なんかも定宿があつて、そこに来て《たにま》がその周辺で生れるんですけども、そういう場所を描いた《山谿秋色》という、卒業制作のこの上高地を描いた、《焼嶽初冬》の後に描かれたのがまくりになって、ずっとなかったというのが、今の先生のお話のように、奥様の方のご実家で見つかつて、それを表装し直して、長野県へ追加寄贈いただいのものでございます。大変大きな2.3m位ある大きな作品で、《焼嶽初冬》も本当にそれだけ大きな物なんですが、大きな作品でございます。

前村・ありがとうございます。それでは時間も来てますので、最後に一村会の会長の美佐さんのほうから。

美佐・美佐です。どうもありがとうございました。先生からその美術館での一村展、あるいはここでの一村展、魁夷展、非常に心強くというか、これからの日本画というか、あるいは絵画を、芸術家に与える影響が大きいんじゃないかと実は思いました。僕は専門家であり、絵描きでありませんので詳しい表現は難しいんですけども、素朴な素人から感じることはですね、魁夷先生が本当に日本画の王道というか、正道というかもずっと西洋画の影響を受けながら、追求する中で、一村さんは凄く同期の魁夷さんをも僕は逆に意識して、すごくライバル心を強く持ってここでの製作にあててきたのではと常々思っていました。それはこちら

にもありますように、同期の加藤さんとか、そういう方からのこう情報とかで、要するに一つの自分の同期としてのなんていうか、目標にもなるべき人物として魁夷さん、でもやはり同じではあってはいけないみたいな、それで自分、性格も違うでしょうし、そういう中で作風がぜんぜん違ってくるし、勿論そういうのを追求する中で、一村さんの絵が生れてきたんだと思うんですね。そういう中でピカソなんかの絵を参考にしたりとか、その写真集、一村さんの写真集にもあって、やはりそうかなあとも思ったんですけども、一村はようするにこうもっと日本画の原点というか、鳥獣戯画じゃないですけど、もっと素朴な日本人が素朴なこう寝食から生み出したものはなんなのかなあみたいなのところにこう入っていったんじゃないかなと気が僕はしています。火炎土器じゃないんですけど、ああいう素朴なこう人間がむき出しに自分のこう印象を表す時に、どういう表現をするかという所に、戻って行ったんじゃないかという気がして、その晩年の魚とエビとクロトン描かれているあの絵がまさか晩年の絵とは僕は全然思わなくて、これから更にこう自分の芸術を描いていくんだという若々しさとかを感じるんですね。一村さんがもう少し90位まで生きたらもしかしたら魁夷さんとかの心境になってああいう絵がもう一度描けたのかなあと思ったりもしたんですね。ですから是非私は素人ですけど本当に、この一村さんとのこう対比する中で一村像がもう少し鮮明になっていったら、一村さんがもう少し解り易くなるのかなあと思ったりしたので、そこらあたりの印象、先生の方からもちょっとお聞きしたいと思います。

伊藤・ありがとうございます。確かに大観以上にですね、ピカソ画集をというお話を拝聴するにつけ、やっぱり、振幅も東山さんのこうなんていうか興味の範囲というのは、土器なんかも参考にはしているんですけど、やっぱりそこでそう簡単にまとめちゃいけないかも知れませんが、都会人でモダニズムとはなにかと、日本の伝統っていうのも、やっぱりそのせいぜいその平安時代の日本人の感覚というのが本当に凝縮されて洗練されたところからのものが、主なる古典の範囲で土器も参考にしたとしても、いわゆる縄文土器とか、ピカソみたいな今の話ような所まではいってなかったんじゃないかなというのが、今伺って思ったことです。東山さんの場合、興味関心は、伝統に更に自分たちの現代性を加えていくという所に集約されているので、斬新さを求めても、荒々しさとか、ダイナミックさみたいなものは要素にないのではと思います。そうした点でいうと一村さんの方が、もっと太古の要素が、それが奄美であったがゆえに余計、それははっきり目の前にあったという事だと思います。最初に申し上げたように、それは東山さんにとっては不幸な原体験というか、南に向く怖さというのをずっと持っていたと私は思うので、常に北へという精神性を律せなければならぬという事でいらっしやったんで、そういう情感豊かなものにはあえて向かないように抑制された表現を求めていた。東山さんは南国の一村さんの描いたようなこう、表情豊かな語りかけてくるようなものがない世界を生きてきたので、違いと言えば全く方向性が違います。やはり一村さんはそっちの方で確かにもっと追求する場所があるんだなあという、今伺って凄く思いました。

前原・それではありがとうございました。多分話しは尽きないと思うのですが、今回のこの講演が良いきっかけとなって、ここでもう版画は貸してもらえるんですね。そういう話もありますので、是非伊藤さんにはまたゆっくりトークをする時間までもっていただいて、良い関係でその後の世代として、美術の発展とかいろんな事をしていったらと思います。今日は本当に有難うございました。皆さん拍手で。それでは奄美パークの事業課長平の方から最後の挨拶がありますので、よろしくお願いします。

平・・・もうだいぶ語りつくしてあまり言う事も無くなったんですけど、伊藤羊子様、具体的で解

りやすく、素晴らしいお話しを本当大変有難うございました。共に同じ時期に生まれまして、東京美術学校に入学したのも関わらず、全く異なった道を歩み続けた東山魁夷さんと田中一村、二人の作品の違いとか、違いだけではなくて、人生のこう歩みとか、そういうものについても、すごく比較できるというか、そういう形でもう凄く興味深く、聞く事ができました。特に先ほどの絵のエピソードの話とか、もう凄く夕星でしたっけ。それとか内だったら「クワズイモと蘇鉄」なんかのいろんなエピソードそれぞれある訳ですがね、本当に凄いなと思いました。私個人といたしましては、この話を聞いた今聞いた後ですね、今から又一村の作品を見に行ったらですね、又全然こう違う又新しい観点に再認識できているとか、それからまた理解出来たりするのかなという感じも致しました。本日は大変意義深いお話が聞けました。本当に有難うございました。

前村・・それでは美術講演を終わらせていただきます。有難うございました。気をつけてお帰りください。

鹿児島県奄美パーク事業報告書
リーフ
第8号
2010年 月発行

編集・発行 奄美群島広域事務組合
(鹿児島県奄美パーク)

〒894-0504 鹿児島県奄美市笠利町節田1834
TEL 0997-55-2333 FAX 0997-55-2612